



あゝ信州よ山の国 誇りは高しアルペンの
峯に輝く雪を以て 希望は高いや更に
さらば歌はむ諸共に 若き血潮のゆくまゝに
あした夕べの友は山 山は我等の姿なる
山は我等の姿なる

思誠寮々歌

第三チーム アンナプルナ山群一周トレッキング隊



1971年のアンナプルナⅡ峰BC跡で、未だに頂上稜線で眠る「故佐藤正敏君」の慰霊祭を行った 38年ぶりに思誠寮寮歌「春寂寥」を全員で肩を組んで歌った
その時、雲に覆われていた頂上がかっきりと現れたのだ
全員で「アラヨ！ 佐藤！」と声を限りに叫んだ 撮影 大島いよ子



アンナプルナⅡ峰 (7,937m) その姿は昔と変わっていなかった



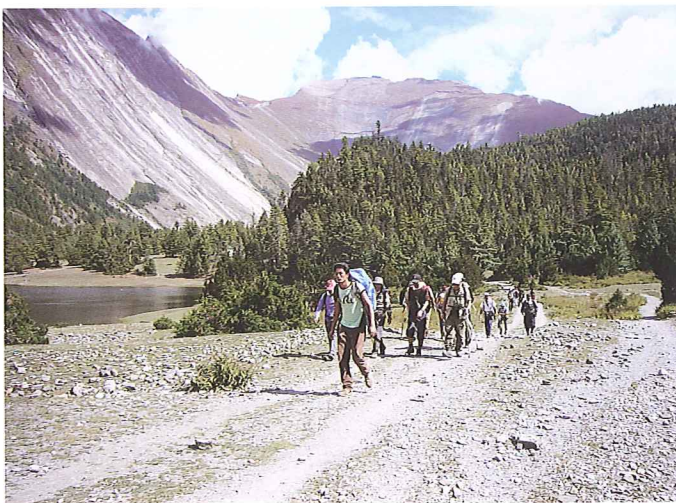
サラタン・コーラBC跡の慰霊ケルンの前で隊員とシェルパ達



9月27日チャーメを越えて初めてアンナプルナII峰北東稜が現れた



マルシャンディ川下流方向にマナスル(8,163m)とピーク29への稜線が見えた



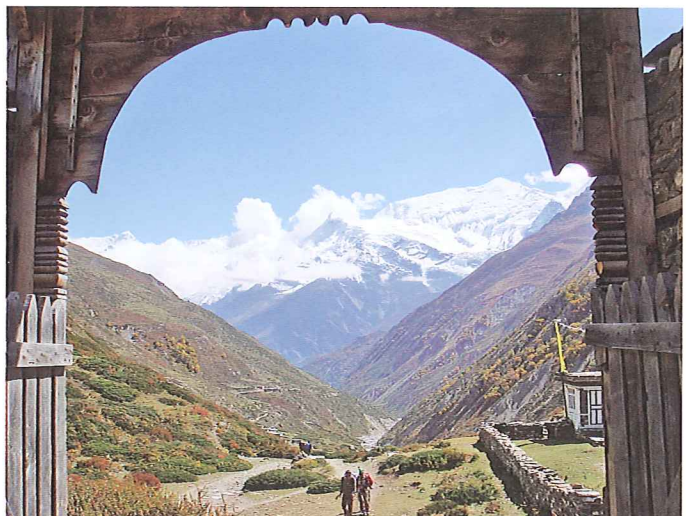
スワルガドワリ(天国へ続く道)をバックにフムデへ向かう

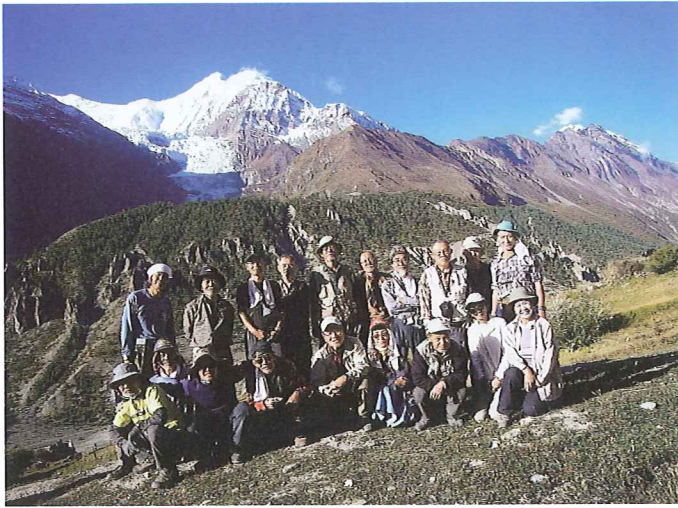
ピサンBCへ向かう尾根からサラ
タン・コーラの上を見る



高度順応のためピサンピーク
BC (4,380m) へ登る
この後、第二隊と感激の対面
となった

チュリラタールからアンナプル
ナIII峰 (7,555m) を見る





ガンガプルナ（7,454m）をバックにマナン上部で



ヤクカルカでチュルーを背景に一休み
撮影 坂本貴男



トロンパスへの最後の宿泊地
ハイキャンプへの登り



10月4日、トロンパス (5,416m) に全員無事に到着。全員の顔に笑顔が戻ってきた。皆さん、ご苦労様！ これからは酒の解禁だ！



トロンパスへの登り。昨日の雪が積もっている



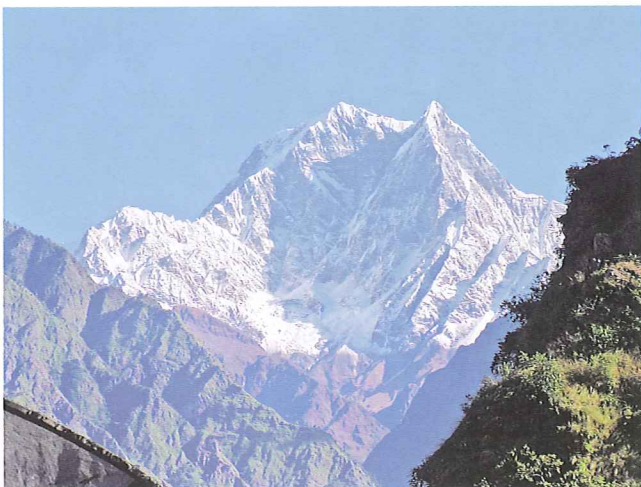
最高地点 トロンパスで故小川勝君の慰霊祭を行った。幻想的なトロンピーク (6,201m) が印象的だった



トロンパスの下りが始まる。遙か向こうにムクチナートが見える 撮影 石山 駿



カリガンダキ川の大褶曲 地球の痕跡は見る者を圧倒する 撮影 石山 駿



タトパニの朝 ニルギリ・サウス峰
(6,839m)



プーンヒルからのダウラギリ峰 (8,167m) ツクチェピーク (6,920m) 左はチューレン・ヒマール (7,371m)
撮影 石山 駿



10月12日 ビレタンティに到着 長かったトレッキングもやっと終わった。
後はナヤプルからバスで第四チームが待っているポカラへ行くだけだ 世話になったサーダーや
シェルバ、ポーターともここで別れだ

行動総括

隊長 松尾 武久

第三チームは総勢19名、71歳を頭に58歳まで、平均年齢は65歳4ヶ月、信大学士山岳会メンバーが13名、その関係者が6名という構成であった。サード（シェルパ頭）によると、高年齢者、19名の大集団、長期間のトレッキングということで、果たして最終日まで行けるかどうか大いに悩んだらしい。しかし、その危惧は出発して2~3日で無くなり、統制のとれた、歩きなれた集団であることが分かり安堵したという。少々の頭痛はあったが、10月4日全員が雪のトロンパスにたどり着き、幻想的な峠を越えられたのは隊員の努力と自制心の賜物であった。その後天気が崩れ、80cmの積雪が峠に積もったとの情報を聞いたとき、最大の難所を間一髪の差で越えられたことに全員で乾杯した。

この他に忘れられないのは、高所訓練を行うためピサンBC（ベースキャンプ）(4,200m)まで登ったとき、丁度ピサンピークの登頂に成功した第二チームが下山してくると遭遇し、彼等の奮闘を称えることが出来、感激の再会を果たしたこと。1971年のアンナプルナⅡ峰(7,937m)遠征時、頂上直下まで行きながら帰路に遭難した佐藤正敏君の追悼を、サラタン・コー

ラのBC跡で挙行でき、息子のことを片時も忘れなかった今は亡きご両親に少しの恩返しが出来たこと。また、その遠征の隊員であった富士山で遭難した片岡格さんの追悼も同時に行えたこと。そして、トレッキングの疲れを物ともせず、小川勝さんの追悼・散骨式に参列するため、ポカラからバラトブル・ジュゲディまでの陸路を移動し、ガンジス川につながるナラヤニ川で散骨を執り行うことが出来たことが挙げられる。

我々の行動目標は、19名全員でトロンパス(5,416m)を超えること、そして、無事に家族のところに帰ることであった。しかし、このトレッキングの最終段階、それも日本に帰国して家族の待つ自宅に帰る途中、JRの中で急死された寺田雅治さんのことを思うと、ご本人の無念さは如何ばかりであったか、胸が張り裂ける思いである。

寺田さんは、我々のチームの副隊長・医療担当として、事前合宿や医療品準備・中高年登山の学術調査等いろいろと積極的に係わっていただいた。トレッキング前半は体調不良で普段の寺田さんらしからぬ状態であったが、後半はトップを歩くようになりいつもの寺田さんに戻ったと安心したもの

だった。

ご家族に聞くと、このトレッキングを最大の楽しみにしてトレーニングも欠かさず続けてこられたとのこと。何をそう急いで逝ってしまわれたのか誠に残念である。

酒が好きでロキシーを美味そうに飲んでいた姿が焼きついて離れない。天

国の山仲間達ときっと一献を傾けているに違いない。寺田雅治先輩！ これからも信大山岳会のこと宜しくお願いいたします。

最後になりましたが、隊員の皆様とご家族、ならびに応援して頂いた方々に心から感謝を申し上げたいと思います。

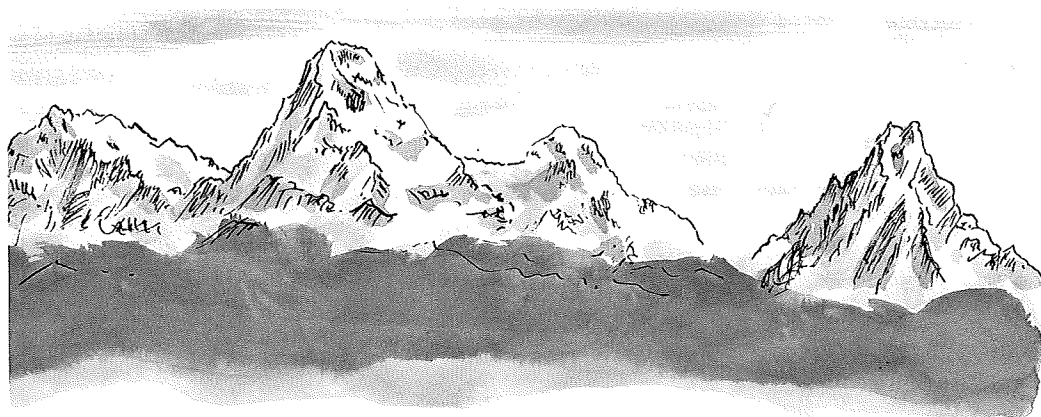
日本隊員

| | | | |
|---------|--------|---------|-------------|
| 隊長・渉外 | 松尾 武久 | 信大学士山岳会 | |
| 副隊長・医療 | 寺田 雅治 | 信大学士山岳会 | |
| 副隊長・通信 | 宇都宮 昭義 | 信大学士山岳会 | |
| 隊員・水質調査 | 葛西 正美 | 信大学士山岳会 | |
| 食糧 | 柴田 武明 | 信大学士山岳会 | |
| 気象 | 板谷 真人 | 信大学士山岳会 | |
| 文化 | 河原 洋 | 信大学士山岳会 | |
| 記録 | 大安 徹雄 | 信大学士山岳会 | |
| 通信 | 池内 寛幸 | 信大学士山岳会 | (ジヨムソンから帰国) |
| 会計 | 大島いよ子 | 松尾友人 | |
| 隊員 | 小原 武 | 信大学士山岳会 | |
| | 奥嶋 啓志 | 信大学士山岳会 | |
| | 川崎 誠 | 信大学士山岳会 | |
| | 杉本 敏宏 | 信大学士山岳会 | |
| | 石山 駿 | 松尾友人 | |
| | 坂本 貴男 | 関根友人 | |
| | 滝川 正子 | 小川友人 | |
| | 大沼 淳一 | 小川友人 | (ジヨムソンから帰国) |
| | 大沼 章子 | 小川友人 | (ジヨムソンから帰国) |

ネパールメンバー

| | | |
|---------|--------------------------------------|-----------------|
| サ ー ダ ー | ディビィ・ライ ハケ岳赤岳鉱泉で働く。日本語は上手い。 | |
| ガ イ ド | ペンバ・タマン (26) | |
| | ダワ・シェルパ・ジュンベシ (22) 日本語はかろうじて。純朴 | |
| | プジェンドラ・ライ (27) 日本語は上手い。大学生。陽気 | |
| | スバス・ライ (26) 日本語はそこそこ。よく働く | |
| | プラ・テンジン・ラマ (17) 語学はまったく駄目、働かない | |
| | スバス・ライ (28) 日本語は少しだけ。太めだが良く働く。 | |
| コ ッ ク | ナワン・シェルパ・タプティ (21) 日本語は少しだけ。要領が良い | |
| | プレム・ピスタ (25) 野菜料理が多かった。要求すればいろいろと出来る | |
| キチンボーイ | デクラス・バタ・ライ (27) | パサン・シェルパ (20) |
| | ゴバ・マクヤ (22) | プハ (17) |
| | ハーリ・ライ (18) | ラチョマン・ライ (25) |
| | サンジュ・ライ (18) | パルキ・ライ (20) |
| | シャタ・ピスタ (43) | ギャンチュラ・タマン (19) |
| | クルバ・タマン (25) | テンジン・シェルパ (17) |
| | マンパデュ・ライ (19) | マニ・クマル (21) |
| | | |

ポーター 4名、ロバ32頭 (正規軍25頭、予備軍7頭)



行動記録

9月22日（火）

成田 9：45→13：25香港

中部10：15→13：25香港

関空11：20→15：50香港

19：20→21：45カトマンズ→23：15

H Gangjong

関空で寺田さん、池内さんと集合。池内さんのご家族、第2隊の隊長予定だった金子さんのお見送りを受けてゲートへと向かう。

キャセイ航空のカウンターで預け荷物の重量1kgオーバー（20kg制限）でひっかかる。「姐ちゃん！ 1kgくらい、まけてーなー」「アカン、香港からのドラゴンエアがチッチャイねん。何か、出し〜」という訳で、ネパールで飲もうと思っていた焼酎を金子さんに預ける。（帰国してから、一部始終を金子さんに撮影され、ブログ上を賑わしていた？ と判明）

台北経由で、香港着。既に成田、中部組が到着して、活気ずいていた。さっそく「青島」ビールで乾杯して、旅の無事を祝った。

ほろ酔いかげんで、満席のドラゴンエアに乗り、真っ暗なカトマンズ空港に着いた。カトマンズは15年ぶりだったが、暗闇に人がいっぱいいて異様な雰囲気は変わっていなかった。ただ、

「マニィー、マニィー」と手を出す子供の姿はなかった。

成田でオーバーした荷物のダンボール箱が1個行方不明、散々探したが見つからず。結局、香港での積み忘れミスと判明。板谷さんの登山靴とアイゼン他が入っていたとのこと。先が思いやられる。

暗闇の中バスに乗込み、遅くまで賑やかな市街のホテルに着いたのは11時過ぎだった。コスモトレックの大津さん他の出迎えを受け、明日からの出発の打合せ、注意事項等を聞き、両替したルピー（¥10,000 = 8,000Rs）を受取り部屋に入ったのは12時過ぎ。それから、同室の坂本さんと「あーじゃ、こーじゃ」と言いながら荷物の仕分けをして、水っぽい、シャワーを浴びて、明日からの旅に興奮気味でベッドに入った。（大安 記）



関空にて（写真 金子鉄男）

9月23日(水) 晴 朝26℃

カトマンズ(1,400m)7:30→11:00カ

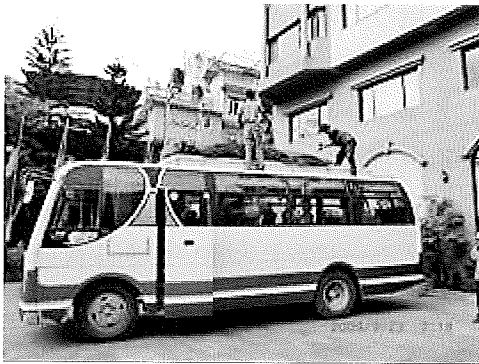
ランキマレク 12:00→13:15デュ

ムレ(460m)

→15:20ベシサハール(760m)

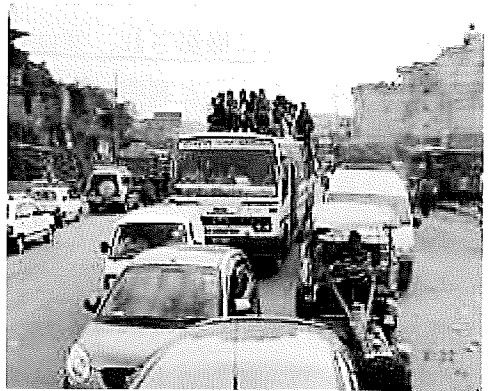
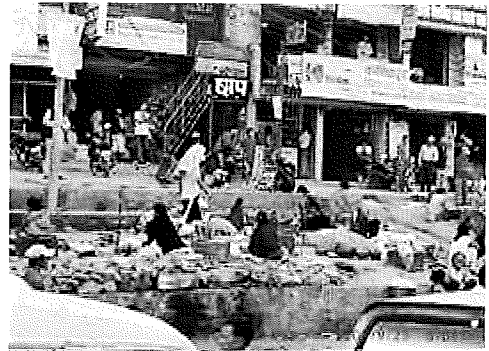
Through Peak Guest House

前日遅く到着したにもかかわらず、早く目が覚めた。カーテンを開けると、カトマンズの街が朝霧の中にあわい街頭の明かりを残している。やがて街の建物が浮かび上がってきた。「ネパールに来たのだ、今日からトレッキングが始まる」と思うと、期待と一抹の不安を感じた目覚めだった。



バイキングの朝食を食べ、ホテルに残す荷をケースに、自分で背負う荷をザックに、残りはダッフルバックへ、それをバスの屋根の上に積込む。赤・白のブーゲンビリア、ペコニアの花で飾られたホテルの庭より出発だ(7時30分)。リングロードを走る、街は雑然としている、ビニール袋やゴミが散乱して、片付ける人もいなく、散ら

かし放題。道路の空き地があると、露天を広げ商売をしている。バスの屋根の上にも人が鈴なりに乗り、タクシー・三輪タクシー・ガーデントラクター・大型のトラクターそしてバイクと我先に先を競って走る、少しでも隙間があると頭を突っ込んでくる、車線はあっていないが如し、交通ルールを無視して追い越しをかけてくる、正にカーチェイスである。バスが停まると、激しい車の通行の中を物売りが直にやってくる、怖くないのか?



カトマンズを離れようやくスムーズに走れるようになった。ハイウエーで

ある、しかし約1.5車線の中央を走るのだが、対向車が来てもなかなか避けられない、ぶつかるぎりぎりになってすれ違う。後ろからの追い越しは、クラクションを激しく鳴らしながら追い越しを掛け、対向車が来てもかまわず走り込み、衝突間際でブレーキを掛けたほうが負けの様な走りである。交通事故にならないのが不思議である。カトマンズ盆地を過ぎ峠のタンコットで軍の検問を受ける、ゲリラ出沒によるチェックのようであるが、旅行者はフリーパス、しかし通行料はとられる。

峠を過ぎると、チベットを水源とする大河の一つで、深い溪谷となっているトリスリコーラに向かって約千m下ってゆく。曲がりくねり、つづら折りになった道を行くが、溪谷の斜面には段々畑が続き、次の山の斜面へと次々と表れる。こんな急峻な斜面をよく耕したもんだと、ただただ感心するのみ。道路端にはバナナが実り里芋や稲・ブラシの木・アジサイ・赤い花を付けたネムの木など熱帯の植物が見られる。人々は大自然の中で物静かに牛・トリ・犬達と共にのんびりと生活している。その中を砂ケムリを上げながら、追い越しや対向車とのすれ違いを繰り返しながらバスは走る。必需品のマスクも利かない、全身砂ホコリになりながら。気が付けば気温が上がり30度位になっていた。

汗とホコリにまみれようやく昼食の

マレクーに到着(11:00)、弁当の昼食を食べる、お茶を飲んだ後 周りの散策。この地は板状石が豊富に産出するのか、家の屋根が石で葺かれている、それも見事な薄さで大きさも揃っている、正にスレートだ。見るとテーブルの板も板状石で出来ていた。

トリスリコーラに添って走る、やがて稲作地帯のタライ盆地となり、土壁の家と家畜達の平地になった。ムグルンでポカラへの道に入る、少しは通行量が減ったか。マルシャンディ川に添って溪谷を走る。デユムレでベシサハールへの分れ道に入る(13:15)、町は人と車と物資が行き交い大混雑と渋滞、交通整理する警察官はいるが、先を競う車の整理には追いつかない。一車線で互いに向き合い、譲る様子もなく、引く様子もない、30分掛りようやく動くようになる。山麓の稲が育つ田園地帯を登って行きようやくベシサハールに到着(15:20)、朝7:25から約8時間のきついバスの旅であった。

このベシサハールは標高760m、カトマンズの1,400mと比較して暑いのは当然であるが、それにしても暑い、日本から来た身には暑さと湿度がこたえる。ロッジ裏にテントが張られている。ポーターも集まり、諸物資も集まっている。野菜満載のカゴ(かぼちゃ・大根・インゲン・ナス・キャベツ)、食器、調味料、鍋、洗面器、バー



ナー類と、すごい物量である。

夕食はロッジの食堂で、これからのトレッキングを祝してビールで乾杯、冷えていないので味はいまいち。それでも祝杯を挙げずにはいられない。我々日本人の食に合わせ、御飯に味噌汁、サラダ、ほうれん草などの純日本食であった。

眠りに着くが暑さが阻害してなかなか眠れない。 (柴田 記)

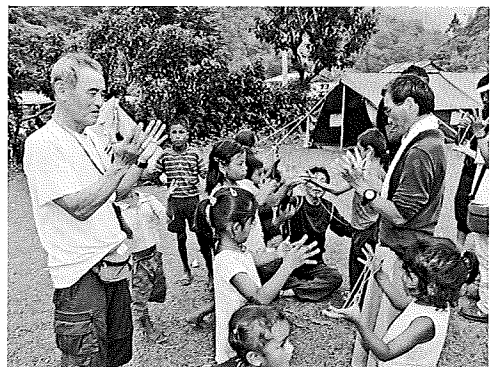
9月24日 (木) 曇り 朝22℃
ベシサハール 7:00→11:30 クデイ (790m)→15:30 ナディ上村 (930m)
TS

5時起床、6時朝食、7時出発の一日が始まる。全員を3チームに分ける。松尾(ハート)寺田(ダイヤ)宇都宮(クローバー)のカードと同じトランプを引いた人を同じ組にした。7時出発、ここからは道が極端に悪くなっているが、ランドクルーザーを利用すると、右岸の道を使ってバウンダラまで行けるようになっていた。我々はその道を

クデイのチェックポストまで歩く。バスやジープが大勢の人を乗せて左右前後に揺れながら低速で走っている。時代の変化は恐ろしい。

71年の遠征時にはクデイの手前のコーラ沿いにポカラから下ってきたように記憶するが定かではない。11:30チェックポストに着く。ここで昼飯。ゆっくりと風に吹かれて大自然をみて過ごす。12:20出発。マルシャンディー川に架かる吊り橋を渡り、左岸の道に行く。ここからはトレッキングロードとなり歩きやすくなった。バウンダラには良いテントサイトが無いということで、手前のナディ上村までとなった。距離が短くなったので、休憩の時間が長くなる。我々がテントサイトに着いたときに、テント設営が終わっているようにするためである。

ナディ・コーラの吊り橋を渡って、左側のテント場に到着。広々としてなかなか良いテント場である。子供達が多く集まってきたので、河原さんが早



子供達と綾取りを楽しむ



速綾取りと折り紙を教え、体重を計測した。子供たちは皆大喜びだった。

夕食は信州ハムのボンレスハムが好評だった。野菜系中心のメニューで、高齢者集団への配慮かもしれないが、やはり蛋白質が必要である。

ビールを売っている店が無いので、高級ブランディーを開けたが、アツという間に空になってしまった。3,000m以上では禁酒であるので、良いことにしよう。これもキャラバンの楽しみである。板谷さんの靴が届いた。丁度良い大きさと良かった。不安の一つが解消した。 (松尾 記)

9月25日(金) 雨のち晴れ時々曇り
朝気温 23℃

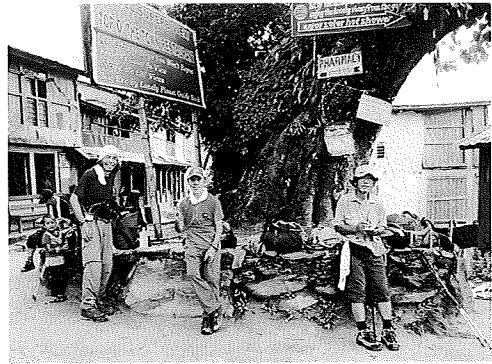
ナディ上村(930m) 7:00→7:45
ランカルカ 8:00→10:50 バガルチャップ

→バウンダンダ(1,310m) →12:50
タニガオン昼食 14:00→16:50 ジャガット(1,300m) TS

マルシャンディ川左岸ランカルカの水田沿いに歩く、晴れると日差しも強く暑い。

水田は狭い棚田で山の上の方まで続き美しい。畝には大豆が植わっている。家周りの木もパパイヤ・マンゴー・バナナと熱帯の様子。

大汗かきかき上がってきた峠の村バウンダンダで大休止 早速村の売店でミネラルウォーターを買い水分補給す



チョータラの下で休憩

る。

昼食になったタニガオンに着いたのは12:50になっていた。

その後一旦マルシャンディ川に下って、長い吊り橋を渡り右岸に取り付く。

道は広い開発中の自動車道路か、上の崖から岩が落ちてきそうであちこち崩壊していて緊張しながら急登し、ようやく安全地帯に出た。

ガオンでピサンピークに連れて行く婦人を伴った第一チームの角谷隊員にであう。

昨日カトマンズからこれからのトレッキングで使用する靴(代品)を持ってきてくれたのは角谷隊員のポーターだったので一言お礼を言うておく。

今日の宿泊地ジャガットに到着、当地はお祭りということで賑やかである。

夜は音楽が鳴り響いて、眠れそうにない。 (板谷 記)

9月26日(土) 晴 朝20℃

ジャガット(1,300m)6:50→7:50
チャムジェ(1,375m)→12:20タール
(1,700m)昼食

13:45→16:40カルテ(1,850m)→
17:45ダラパニTS(1,860m)

ジャガットのテント場は街道から少し入った石垣と建物に囲まれた場所であり、南隣の集会所では祭りを祝う村人の歌や踊りが夜遅くまで賑やかに繰り広げられていた。

朝5時にガイドが運んでくれたモーニングティで起床、キッチンボーイが洗面器に準備してくれた湯で洗顔、各自テントの中の荷を纏めてポーターに預け、出発の準備を整えてテント場から少し離れたロッジの庭のテーブルを借りて6時からの朝食、メニューはご飯と味噌汁そして目玉焼きとキャベツと玉葱の野菜炒めと和食風、これに日本から持参の“ノリタマふりかけ”が鬼に金棒・朝青龍となって食欲増進となる、ご飯二回戦が終わる頃、荷運び準備のために前の道を我がロバ群団がガランガランと鈴を響かせて通るのを合図に食事終了、行動中の飲物として紅茶を作る人、白湯をボトルに入れる人、ロッジからミネラルウォーターを購入する人、トイレを済ます人、そして寺田さん指導の下に熟大メイトをセットする人、松尾隊長準備のトランプでハート・ダイヤ・クラブの三班に分かれて出発するまでが少し忙しい。

トレッキングの朝タイム、5・6・7のタイミングは始めの頃は「忙しい、忙しい、便所もゆっくり出来ない、何処がビスターラ・ビスターラだ…」と思ったが、慣れてくると少し緊張が維持できて丁度よいタイミングだ、今日は予定より10分早い6時50分に出発できた。

マルシャンディ川沿い右岸の道は高巻きしたり川辺に下りたりアップダウンを繰り返して徐々に両岸が切り立って川幅が狭くなるとチャムジェに到着(7:50) バッティ前のチョータラで1本。



これでもホテルだ

今日はダサイン祭の3日目マハ・アスタミ(生け贄を捧げる日)なので通り過ぎる部落ごとに村人が水牛・ヤギを血を飛び散らすでもなく、とても綺麗に解体している。(写真撮影はご法度)



チャムジェを出るとすぐにマルシャンディ川を吊橋で左岸に渡る、葛西さんが橋の下で水のサンプリングを行なう、巨岩が入り組んだ河原で激流からの採水、足場も悪く少しヤバイ状況であったが無事終了、トレッキングの隊列に戻る。

10：05 前方の山並みの上に白く光る峰が少し見えた、カングルーの手前にある無名峰ではないかとの事だったがトレッキング開始して初めて見る雪の峰、感激である。

左岸の道は幅が5m以上もある新しい道が出来ていてガイドが道を間違えてしまうほどだった、ビスターラ・ビスターラと歩いて三ピッチでタールベシに到着（11：05）谷を挟んだ向こう岩壁に三段滝が見えるバツティでティータイム、日本にあれば展望台が出来、みやげ物屋が並び観光客が群がるような見事な滝である、バツティの主に滝の名前を聞いたら英語で「waterfall」、滝も岩壁も山もいちいち名前を付けたら面倒くさいのか、ジスイス・ネパール名無しの権兵衛でした。

ここから兩岸は切り立ち川幅も10m位に狭まり道も細く急登となる、25分ほどのアルバイトで急坂を登りきると突然目の前が大きく開け、釜トンンを抜けて上高地にでたように広々としてマルシャンディ川も緩やかな流れに変わり歩いて渡れそうに広がってい

る、キッチンボーイが冷たいジュースを準備して待って居てくれた、そこでジュース1本。（11：40）

部落の入口には必ずマニ車かマニ石の列がある、ガイドから教わった六字名号「オンマニペメフン」と唱えて一つずつ右手で廻したり撫でたりしてたのが、30以上も並んでいると疲れてしまう感じがしないでもなくオン・マニ・ペメ・フンと四つ廻してしまう事もある、トレッキングの無事を祈りながら一心に廻して通り過ぎる、そして立派なカンニを潜ってタールに到着（12：20）

キッチンボーイの荷は誰がどのように配分するのか、重くて荷造りが難しい形の火器を担ぐのは新人なのか、いつも隊列の一番後ろをバテ気味に歩いていた、今日はタールの炊事場への到着が少し遅れたのでその分昼の休憩時間が長くなった、のんびり尺八を吹いていると子供が不思議そうに近づいてくる、無理もない、まだ音が本物でない上にネパールの笛は横笛なのに縦に尺八を吹いている、珍しいのか下の穴からのぞき込むので手にとって見せようとしたら逃げていった、ネパール語か英語で話しかければよいのだろうが、「なますてい」・「びすたーら」の二文字しか知らぬ身ではなかなか意思の疎通もままならない。（13：45発）

カルテを過ぎてマルシャンディ川を吊橋で右岸へと渡る手前まで二ピッ

ち、小さな滝が落ちる岩壁の途中に不思議な形をした実が鈴なりになっている植物を見つけた、飛びついたりよじ登ったりストックを使ったり最後には肩車をしてやっと手にする、柴田蘭博士の見立てではネパール特有のピンクの花が咲く蘭の種子だとか、珍しいからと種子を持ち帰る訳にはゆかずにカメラに納める(15:20)今日の行程はビスターラ、ビスターラ、テント場へ10分ほど手前のチョータラで今夜の準備が出来るまで一時間ほどのティータイムを過ごしてから、ビスターラとダラパニのテント場に到着。(17:45)(本日の行動時間 10時間55分)

(宇都宮 記)

9月27日(日) 快晴 朝15℃

ダラパニ7:00→8:35ダナキュウ(2,300m)→10:30ティマン(2,270m)
昼食→13:10タンチョーク→15:10コト(2,600m)→16:05チャーメTS(2,760m)

マナスルが見えた!

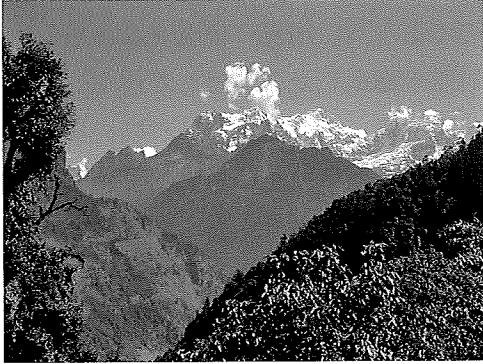
夜半に数回目が覚めた。何事にもトロイ私はパッキングに時間がかかるので、4時には起き出す。まず体温を測定し、胸に心電計(これを忘れると後でやっかい)、右腕に心拍計、左腕に熟大メイトを装着し、体力測定の準備完了。それからパッキングにとりかかる。

トレッキングが開始されてから昨日まで1日の行動時間が予想外に長く、背負ったフィルムカメラがけっこう重く腰に負担がかかってきた(特に昨日はひどかった)。今回のツアーでは、皆さんに迷惑がかからないよう絶対に落伍せずに歩き通すことを自分自身の鉄則としていたので、トレッキングはまだ始まったばかりなのにバテテしまつてはと、これから先のことを考えると不安になってきた。それで本意ではあったが、今日からパーソナルポーターをお願いした。荷物を持ってもらったのはアシスタントガイドのダワさん。彼はシェルパ族の出身で、瞳が大きく、笑うと真っ白な歯が印象的なナイスガイ。体格もがっしりしていてこれならこの身を任せ、じゃないカメラザックを託しても大丈夫。ニコリ笑って軽々と背負ってくれた。片言の日本語と英語で何とか話は通じるようだ。

予定通りダラパニを7時に出発。何という身軽さ。ルンルン気分で歩き出す(大名登山どころかお姫様気分)。30分ほど行くとアンナプルナII峰(7,937m)の北東稜が遠くに見え始め、ダナキュウを過ぎたあたりからはマナスル(8,163m)の白き峰々が見えてきた!トレッキングが始まってからようやく眺められた高山に胸が躍る。でも、山頂は雲に隠れなかなか全貌を現してくれない。マルシャンディ川



に沿って歩を進め、石段を上るとティマンに到着。そこでゆっくり昼食をとる。村では、ダサイン（ヒンドゥー教の最大のお祭り）のせいであちこちで羊や山羊を解体していた。



マナスルが見えた

日が高く昇るにつれ、どんどん暑くなる。日差しも強くネパールが亜熱帯地域だということを思い起こさせる（エベレスト街道を歩いたときは2,600mのルクラから歩き始めたので涼しかったが）。道中、フウロソウやキツリフネソウ、ルリソウに似た花が咲いていて目を楽しませてくれる。独特の香りがするイブキジャコウソウの花も見られた。

庭にコスモスが咲き、窓枠が青く縁取られた洒落たロッジがあるタンチョークで休憩。樹林帯の中をさらに行くときとコト。右手には第1チームが北上していったプーガオンへの分岐路が続いている。リング林が続き、黄緑色のと紅玉に似た赤色の2種類が実っている。

白い大きなカンニをくぐるとチャーム。長いマニ車があり、回しながら町に入っていく。銀行もありインターネットや国際電話もできる、わりと大きな町だ。道端で人だかりがしているの覗いてみると、トランプのクラブやダイヤのマークが大きくプリントされた布を広げ、数人がお札を持って何やら叫んでいる。聞くと、賭博をやっているとのこと。このような光景はその後であちこちで見られた。老若男女を問わず、ネパール人は賭け事が好きらしい。

町中を抜け、ようやく今夜のテント場に到着。マルシャンディ川の対岸に温泉があるとのことで、早速数人が水着を持って出かけて行った。私は水着を持っていなかったの、ロッジでシャワーを浴びることにした（50ルピー）。シャワーといっても、ロッジの人が沸かしてくれたバケツ一杯のお湯を使っただけの行水だが、やはり汗を流すと気持ちいい。

さてさて標高も2,760mとなり、今夜からトロンパス越えまでの禁酒令が隊長から出る。代わりに？ ダイアモックスが支給され、夕食後半錠服用。いよいよトロンパスへ向けての準備開始だ。皆さん、アルコールが飲めず渋い顔だったが、緊張感も高まってくる。

今日はカメラザックをダワさんに背負ってもらったお蔭で、昨日とは打っ

て変わり膝・腰の痛みも全くなき快調な1日だった。でも、もうこのカメラを自分で背負って歩くことはできないのかと少し落ち込む…。

★本日の歩数⇒28,294歩、消費カロリー⇒1,038kcal。 (大島 記)

9月28日(月) 晴 朝10℃

チャーメ6 : 50 →7 : 30 タレクウ(2,720m)→9 : 05 バラタン(2,850m)→11 : 30 デュクレポカリ(3,060m)

昼食→14 : 25 ピサン下村TS

(個人的には、昨夜から配給の始まったダイアモックスを1粒飲んで、5回もトイレに起きるといふ、さんざんな夜を送って目覚めた。怪我の功名は満天の星空で、あまりの数に馴染みの星座の同定も困難であった。ダイアモックスは、今日以降、決して飲むまいと決めた。)

朝一番、チャーメ西端のマルシャンディ川のつり橋をテント設営地の右岸から左岸に渡って、歩き始める。橋を渡りながら、振り返ると、真正面にはラムジュンの白い壁、左にはマナスル方面の白い壁、右にはアンナプルナの尾根の白い雪面が青空に映え、今日の天気を保証している。左岸に渡って仏塔の門をくぐり抜けると、まもなく、緩やかな松林の登りで、道は比較的広い。朝の日差しに輝く松は種類こそ違いますが、雰囲気は日本の松林にも似ている。きのこが得意な仲間の探索心を擽

る。松葉や枯れ葉はいい感じに落ちてはいるが、食べられるきのこは実際にはなかなか見つからなかった。(柴田さんがアマタケを見つけたのはこの辺りだったでしょうか、…)

V字谷のどん詰まりは石灰岩の山なのであろう、雨風に侵食され放しの岩肌が露出した荒涼とした谷で、さらにその奥には、巨大な一枚岩の山(名称は「天国に続く山」と聞く)が座っている。見とれながらも歩を進めてV字谷最後のつり橋を渡ると、道は広く両脇に池(ポカリ)を配したU字谷に入る。道草好きがますます道草したくなる風景だ。水量の少ない池は、湿地といった方が良いかもしれず、ヒルムシロやマルイが群生していた。ピサンピーク方面をバックにしたポカリは、ひらめくタルチョや居眠りする水牛を配してまさに桃源郷の様子で、まるごと絵葉書の世界にただうっとり、足を止めずにはいられなかった。



スワルガドワリの大スラブ

ランチタイムは、デュクレポカリで

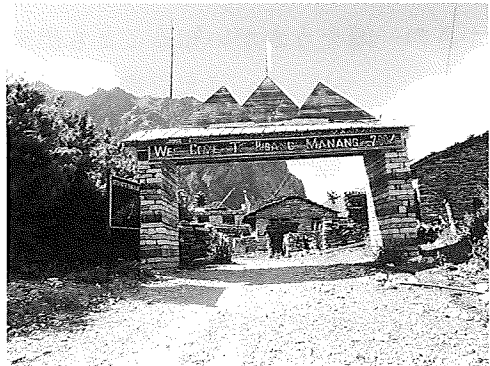


たっぷり2時間あった。真昼の日ざしは爽やかで、村の共同水道の蛇口を見つけてホコリと汗にまみれたタオルを洗い、ついでに髪まで洗いましょうか、そんな気分させてくれる。ガイド諸氏は、食卓の準備ができれば、ランチのウェイターの役目までランチ調理中は自由時間。2人、3人と寄り集まっては、なにやら楽しそうに話している。出身が、シェルパ、ライ、タマン等々異なるため、部族を超えた若者交流の時間だ。

ここで、ポカラ在住の青年と同行になり、その後ムクチナート辺りまで、相前後して歩く。一緒にいたスェーデン娘は我ら同様旅の道連れで、ポカラには妻子がいて、娘さんが小さいので一人旅だとのこと。2年前東京で失職して200万円持って日本を脱出、ポカラでネパール娘と結婚。まだ70万円は残っている(妻はポカラで収入あり)が、娘の教育のためには日本に帰りたいたいという。軽装なのが気になったが、よくしゃべる気さくな青年であった。

この日も、街道で出会ったドイツ人、イスラエル人、スェーデン人、アメリカ人、韓国人等外国人トレッカーとは、“ナマステ”と挨拶を交わした。もちろん、製材所を過ぎた頃よりピサン方面に3m以上もある板を担いでゆく人、自転車で走り去る人、羊を連れて歩く人、収穫の終わった麦やそばの茎を家畜の餌に運ぶ人等地元の人にも

“ナマステ”と挨拶した。しかし、“ナマステ”以外に使ったネパール語は、ダンニェバード(ありがとう)、スラバチア(おはよう)、スバラキア(こんばんは)、カティパイサ(いくら)くらいで、何人か日本語の出来るガイドさんがいたこともあって、残念ながらほとんど使うことはなかったように思う。



このゲートの向こうがピサンだ

ピサン下村に着くと、最初は街道から30m程階段を登ったホテルに入った。風もあり冷えてきたので、皆1枚多く着る。定時交信で、今日が第二隊のピサンピークアタックの日であることを知っている池内さんは、羽毛服に身をくるんで、望遠鏡を片手に外でピサンピークを眺めている。ピサンピークは雲の中だが、かろうじて下部の雪面が見える。池内さんの執念であろうか、左端、岩肌が黒く“くの字”を書いているその右横を降りている人がいるという。皆、興奮気味に次々に望遠鏡やカメラの望遠レンズをのぞいた

が、もうひとつ半信半疑。その後、このホテルは高台にあって水が少ないため、水のあるテント場まで移動することになり、それ以上のウオッチングは出来なかった（後日、この時間はピッタリ一致したとのこと）。

ホテルの食堂には、オーナーのマカロニウエスタン俳優顔負けのかっこいいカーボーイ写真があり、マルシャンディ・アンナプルナ街道の交流の華やかさの一端をうかがい知ることも出来た。（大沼章子 記）

9月29日（火） 晴 朝5℃

ピサン下村6:36→9:05主尾根の
コル(3,740m)→10:25ピサンBC
(4,180m)→ピサン下村

ピサンを登頂した仲間を迎えに

本日はピサン下村3,200mから、第二チームの仲間たちを迎えに行く日である。第二チームはピサン頂上6,091mに登頂し、下山の予定である。この日の記録を書く前に、昨日までの記録も残しておきたい。

2009年9月28日（月）午後2:30、われわれ第三チームはピサン下村に到着した。ヒマラヤの午後はいつも強風が吹き、雲やガスが出て寒くなる。

ピサン頂上はガスっていて見えにくかったが、ときどきガスが晴れ、頂上直下の雪面(クーロアール)が見えた。よく見ると人影が動いているのがわか

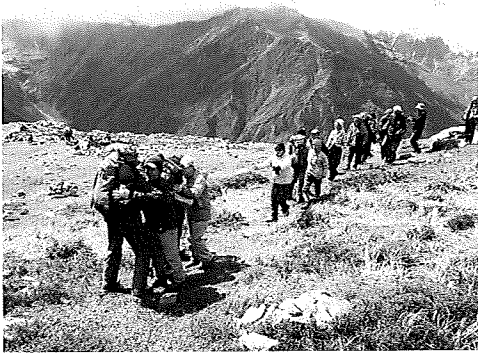
る。大島さんから16倍の双眼鏡を借りて観察していたところ、なんと雪田クーロアール左端のくの字に沿って5名の下山下降が見えるではないか。第二チームかもしれないとの期待で、首が痛くなるほど見ていた。無事に帰ってね、と祈るばかりであった。午後4時過ぎまで見ていたが、とうとうガスで覆われ見えなくなった。身体はすっかり冷えてしまった。

思えば、私も第二チームに志願し、登頂の準備をしてきた。2ヶ月間休暇が取れば私も登っていたであろう。しかし、仕事の事情が許さず、3週間の休暇をとって第三チームに参加し、途中帰国するのがやっとならであった。

9月29日（火）、5:00起床、6:36出発、気温5℃、晴れ。はやる気持ちを抑えて、大沼章子さんとポーターと3名で先陣を切って登る。8:30:3,740mコル、9:40:ピサンBCキャンプ4,180m、10:30:4,500m地点で第二チームと会う。豆粒ほどの人影から、だんだんと近づいてくるにつれ、嬉しさでいっぱいになった。

感動だった。皆顔がむくみ、パンパンだった。昨日から水分が取れなかったとのことである。身体もへ口へ口だった。しかし、しっかりした足取りであった。

下山の途中、小高い丘の上にケルンが見えた。小川さんのお墓を作ったとのこと。皆で小川さんのお墓参りをし



感動の一瞬。

左から山内(背中)、松尾、神野(背中)、葛西、駒井(葛西の後ろ)、小原、佐藤(背中)、川崎、大安、杉本、柴田、小林(背中)、一人置いて宇都宮(敬称略)

た。小川さん、ピサンの麓で第二チームを見守ってくれてありがとう。無事に帰還しました。

12:00にピサンBCキャンプ4,180mに到着。ここで第3チームの全員が「血は燃え盛る」を合唱し、第二チームを迎える。抱き合い、握手をし、またまた感動の一瞬であった。(池内 記)

9月30日(水) 曇り/晴 朝10℃
 ピサン下村(3,200m)TS 9:00→
 10:40 アンナプルナII BC(3,500m)
 13:20
 →14:45 ピサン下村TS(3,500m)

①松尾 記

今日は休養日を兼ねてアンナII BCで慰霊祭を行う日である。毎日5時起床であったが、第二チームが9時出発としてくれとのことで、7時半起床、

8時食事、9時出発とした。ゆっくりと朝寝ができた。

9時に出発して、38年ぶりにサラタン・コーラに入った。当時は右岸を歩いたが、道は左岸に変わっていた。出口の段丘が深くなっており、松林の急坂を登る。2時間弱でコーラがひらけた。見覚えのある河原だが様子は全く変わっていた。正面の滝は昔のままだったが、氷河は後退しているように感じた。

大きな岩の上に全員の協力で立派なケルンが出来た。その前に供物を置き、佐藤正敏さんの写真と弟の敏信さんから預かってきた家族全員の写真を飾った。また片岡格さんの写真も飾り、宇都宮さんのリードで慰霊祭が始まった。読経中、一人ひとりが線香を手向けて、アンナプルナII峰遠征隊のお二人のために祈ってもらった。その



全員で造った慰霊のケルン

後、日本酒も少しずつかけてもらった。日本で練習してきた「誰もいない海」を演奏した。この歌は佐藤正敏さんに教えてもらった思い出の歌であった。

「雲にうそぶく」「春寂寥」を全員で肩を組んで歌った。涙が止まらなかった。ちょうどアンナプルナⅡ峰、ピサン・ピークも姿を見せるようになり、我々の気持ちが通じたようだった。敏信さんから預かってきた家族の写真は、水に流されないようにすこし小高い場所にある岩の下の窪みに、アンナプルナⅡ峰の方向に向けて置いて来た。正敏君の霊とお父さんお母さんの霊が一緒になることを切に祈った。

13:00去りがたい気持ちを残し、ピサン下村のテント場に帰った。14:57着

夜はピサン・ピーク登頂を祝して、第二チームの5名とシェルパを招待して、羊を一頭頂くことになっていた。取って置きの日本酒で乾杯した。第二チームのメンバーも皆元気を取り戻しており、我々と一夜を過ごせることを喜んでいた。登山話や今までのキャラバンのこと、話はつきなかったが、明日もあるので20時にはお開きとして「ポンカラ節」「雲にうそぶく」「レッサムピリリ」を歌って、これからの健闘を誓いあった。

自分の気持ちの中にサラタン・コーラに一度行きたいと思っていたので、

38年ぶりに実現できたことで、何か一つ心のつかえがおりた様な気がした一日だった。

明日はマナンまでだ！

②宇都宮 記

当初の第三チーム本日の行動予定は、昨夜はピサンBCに泊り、今朝はゆっくりピサン村に戻ってくる日程であったが、学士会員はもとより他のメンバーも、アンナプルナⅡ峰で遭難した佐藤さんと富士山で遭難した片岡さん（アンナ隊員）を慰霊する日程を作ろうと頑張り、昨日一日でピサンBC往復を終わらせたので、今日は休養日を兼ねてアンナプルナⅡ峰BCへの往復となった。

いつもよりゆったりとした朝を過ごし、9時にピサン下村を出発した、二ピッチでサラタン・コーラの滝を正面に見渡す河原に到着、途中で昨日ピサンから下山してまだ行動疲れが残っているであろう第二チームメンバー5名も追いついて、第三チームメンバー19名、そして両チームのサード・ポーター8名、合計32名による慰霊祭となった。

松尾さんからアンナプルナⅡ峰遠征の時のBCの様子、登攀ルート選定の苦労話、その登攀ルートと極地法での各テント位置を指呼により教えて頂いて当時の苦労を偲んだのちに、参加者全員が奮闘して立派なケルンをアンナ

プルナⅡ峰とピサンピークがよく見晴らせる大きな岩の上に造り上げた。

佐藤さんの写真と片岡さんの写真をケレンの前に飾り、隊員が持ち寄った供物をプレムコックさんから借用した食器に並べ、アンナプルナⅡ峰の水河から流れ来る沢水で身を清め道衣に着

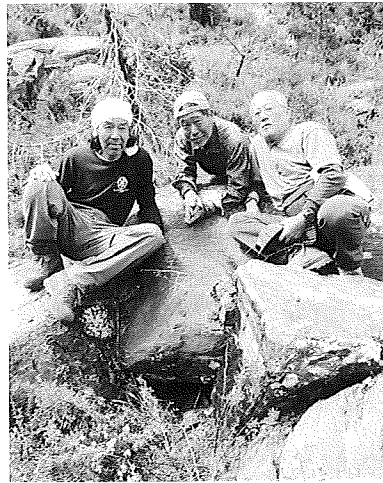


肩を組んで春寂寥を唄う

替えた宇都宮が読経をする中を、松尾さんが回向文を読み上げ、参加者が一人ずつ線香を手向けて佐藤さん・片岡さん兩名の冥福を祈った、そしてケレンに酒とタバコを手向けて回向したのちに、松尾さんのコリーダ演奏で佐藤さんの愛唱歌「誰もいない海」を皆で歌った。

最後に全員で肩を組み「雲に嘯く」「春寂寥」喉が裂けるほどの大声で歌った、歌を知らないサーダー・ポーターも円陣に加わり一緒に肩を揺すってくれた、目を閉じて歌っていると瞳の中に数十年前の若いままの二人が笑いかけてくる、思わず声が詰まってしまう…参った。

慰霊祭も終わり皆が去りがたい余韻を残して下山したあとで、アンナプルナⅡ峰を正面にする小高い岩の基に、水で流されたり動物に荒らされたりしないように石で囲って、そしてアンナプルナⅡ峰を見る事が出来るように小さな窓を作った場所に、松尾さんが預かってきた佐藤さん家族の写真を安置した。



この岩の下に佐藤の家族の写真を置いた

14時45分ピサン下村に帰着、洗濯、装備の点検、日本へのハガキ書き、熟大メイトの充電とそれぞれが午後の休養時間を有意義にすごした。

私はロッジの軒下にあったケレン（ネパール式ビリヤード）でロッジの長男坊主（10歳）と勝負したが、私がつもチップを穴に落とさぬ内に彼は全てを落とし終わってしまう有様で、何回勝負を挑んでもテンで歯が立たない、これはあまり有意義にすごした事

ではなかったような気もする。

夜はテント場持ち主のロッジ食堂で、第二チームのメンバーとシェルパを招待してピサンピーク登頂祝いを行った、日本からはるばる運んだ日本酒で乾杯、プレミアムコックさんが腕によりをかけたパーティ料理の羊を一頭頂きながら、第二チームの登山報告、第三チームのトレッキング報告と、歌も「ポンカラ節」「信大数え歌」「ネパール歌謡曲 レッサムピリリ」「雲に嘯く」など次々とでて話が尽きない、翌日の計画もあるのでお互いに健闘を祈り合って20時過ぎにお開きとなった。

1971年のアンナプルナⅡ峰遠征で不慮の遭難死をされた佐藤正敏さんの慰霊祭を当時のBCで行った。

当時の遠征メンバーは今回松尾隊長だけであるが、信大山岳会にとっては忘れることのできない歴史であり、今回のメインイベントの1つであった。

佐藤さんは自分が信大山岳部に入部した時、3年生であったが、小生が2浪していたため佐藤さんと小生は同年生まれであった。しかし、当然ながら「山岳部は部歴」であり、山の経験の無かった自分は散々しごかれ、「山」というものを教えてもらった。

そして、アンナプルナⅡ峰の遠征が具体化し、佐藤さんが隊員に選ばれ、松本在住の我々は自分のことのように、感激し、企業への物品の寄付依

頼やパッキングに学業を忘れて没頭した。そんな佐藤さんから「大安 おめえのピッケル、アンナで貸してくれ」と言われた時には内心嬉しかった。その年の冬山用にバイトで貯めて、「グリベル」を購入していた。

自分では使いこなせそうもないピッケルが、佐藤さんと一緒にヒマラヤに行く。

考えただけでも興奮したものだっ

た。そんなことを思い出しながら、サラタン川沿いに歩くこと小1時間、目の前にドーンとアイスフォールが広がった。出発前に見てきた1971年の報告書の白黒写真と同じだ！プレとポストの違いか、温暖化の影響か下の方はかなり水が流れ草付きが見られたがまさしくあの写真の世界だった。

第二チーム、第三チームの面々、ガイド、キッチン全員で大きなケルンを作った。

宇都宮僧侶の読経により、厳かにみんな佐藤さん、片岡さんの追悼を行った。

合わせたように、雲も切れ稜線が見え、青空が広がってきた。

「佐藤さん、来ましたよ！」手を合わせて、目をつぶった。(大安 記)

10月1日(木) 曇り 朝8℃
ピサン下村7:00→9:40フムデ(3,280m)
→11:35ムンギ(3,330m)昼食

→14:40マナン(3,450m)Hotel Moonlight TS

昨日はアンナプルナⅡ峰へ遠征時のBCへ第二チームのメンバーの一部の隊員と共に慰霊祭を行った。これからトロンパスへの行程への第一歩の日。9月24日ベシサハールを出発し7日目の出発となる。

今日のピサンからマナンまでの行程はマルシャンディ川沿の中では最も川幅も広くまた標高差(約260m)も少ない上に、山々の展望がよく気持ちの良いトレッキングが出来た一日であった。しかし自分の体調が優れず、胃の不調は少し良くなったが、鼻水と喉の痛みとの戦いで行動でもあった。しかしこれらを癒してくれる風景でもあった。行動記録を記載する前に自分の体調の概要を記録しておく。

9月27日、Chameにて温泉に入り気分を好くしたはずが、28日Pisangでの夕食が美味しくなく、胃が重くなった(途中購入の180ルピアのコーラを飲んだ為なのか?原因不明)。29日、朝食ほとんど食せず、ピサン上村の手前でキジ撃ち。主尾根のコルで下山を決意(昨日より調子がよく、更なる行動を考えたが翌日の行動を考え自重した)。テント帰着時のジュース吐き気がして飲めず、医療班寺田隊員よりのガスター20服用。30日、朝食は相変わらず喉を通らないが前日より良くなる、昼食は美味しく食べられた。夕食

はまだ美味しく食べられる状況では無く、また夕食後より鼻水が出始めた。

行動記録

5時起床

気温8℃ 爽やかな朝

6時朝食

梅干が美味しい。少し胃の調子よくなったようだ。

快便、お好みぞと立ち上がる、そのとき音がする、便器に熟年メイトが見える。

なんとか拾い上げるが、水に浸かり機能しなくなる。情けナヤ。

7:00~7:55

テント地出発、第2グループのピサン宿泊ロッジ横目にアンナプルナⅡ峰を仰ぎながら進む、この間2組の西洋人のパーティーに道を譲る。休憩時頭上に飛行機。

8:05~8:55

少し心臓の動悸があるものの足の調子はよいが、Pembaと二人で後より歩む、二人とも風邪気味で鼻をたらしながら、また喉がイタイタイとボヤキながら。

HumdeVillageの少し手前にて休憩。

Humdeへの飛行機撮影。

9:10~9:45

フムデの町で建物の改修工事を見ながら、フムデ飛行場まで進み休憩する。

10:00~10:45

前方の土柱の山を楽しみながら進み、

左岸よりの川に掛かる橋を渡りしばらく行くと、小さな池が、ここで休憩、この場所はアンナプルナ、ガンガプルナの雄姿を楽しめる絶好の休憩地であった。

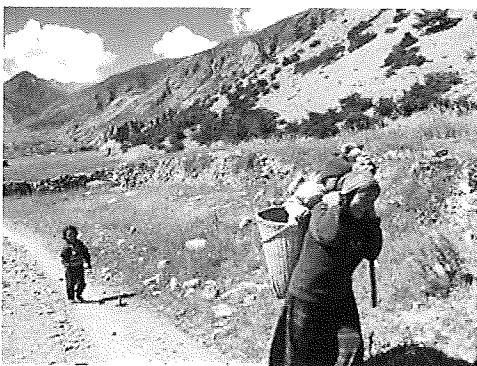
11:15~11:45

蕎麦の稲柄を背負う女性に会う、しばらくするとMungjiに着いた。アンナプルナⅢ峰、グレーシャドーム、ティリツォピークを望みながら昼食。

13:35~14:40

ムンギ村を出て、母親が小さな子を籠に背負いその後を子供が追う光景を写真撮影、しばらくすると、岩山に連なるへばり付いた建物が特徴のある落ち着いた村バラガ村に着き13:50小休止。この町はヨーロッパアルプスの町の雰囲気を醸し出していた。この町を出てチベット族の村であり首都のマナンに着く、郵便局等もあるマルシャンディ川沿いの落ち着いた最大の町であった。

到着後、ロッヂに入りゆっくりす



ベラガ村よりムンギ村へ向かう親子

る、テント設営まで時間があり各自買い物・写真撮影等ゆっくり時間を楽しんだ一日でした。

10月7日微熱が無くなり体調回復までの間、最も調子のよい一日であった。(奥嶋 記)



マナンより

10月2日(金) 晴→小雪 朝1℃

マナン(3,540m)6:55→8:45グンサン(3,900m)9:05→9:55ギャンチャン10:20

→11:15ヤク・カルカ(4,018m)昼食

13:30→14:15レダールTS(4,200m)

14:35⇔15:30高度順応(4,400m)

9月24日トレッキング初日から続く、シェルパの朝の紅茶、洗面湯の各テントへの配付サービスにせかされながら、慌しく 個人装備の片付け、荷造り、テントから這い出て靴を履く、トイレに赴く、といった一連の動作が通常の倍、いや3倍以上の労力と時間を要する様になり、息切れ、鼻水、咳、尿意の頻度、動作の緩慢さが、この日以降激しくなった様に思う。日本

では富士山以上の標高の経験は無く、4,000mを越えるエリアに来れば一般の日本人ならこんな風になるのは当たり前と自分自身に言い聞かせながら歩いたものだ。

グンサン8:45到着、ギャンチャン9:55到着、それぞれ小休憩を取りながらヤク・カルカに11:15到着。昼食の長休憩の後13時30分出発、レダール到着14:15。此処が本日のテント宿营地（標高4,200m）。

小休憩後、テント場斜面上部の目視で凡そ1km、標高4,400mの丘まで、高度順応の為の往復散歩に出発。

体調不良の数名を除いて出発したが、小生も行程の半分の処でダウン。小雪の舞う斜面に屈みこんで珍しい高山植物をデジカメに収めたが、あまり良い写真にならなかった。50m程先の処をテンカイタチに似た小動物がブッシュの中に駆け抜ける姿を見かけるも、残念ながらカメラに収めるのもあたわず、ヤクの放牧する牧童を見かけカメラを構えたところで、電池切れをおこし写真は散々で、丘上から帰って来る一行に合流してテント場に帰った。

トレッキング開始当初4日間位消化器系の不調に見舞われ、共同装備の薬と南高梅のお陰で回復し、5日目位で傷めた左足親指付け根の肉刺も同行の石山駿さんに、アメリカ製の特殊絆創膏で対処して戴いた後、調子良く、帰国後もそのまま回復し、この時点では、

標高高度から来る呼吸器系の不調以外、脚の疲労も全く無く、2日後回り迫った最大の難所トロンパスに向かって何とはなしに「息切れと失禁を克服すれば越えられそうだ」との感触を得た一日であった。数日後、無事5,416mのトロンパス越えを終え、ジョムソン辺りで、松尾隊長に最高齢者に対する気配りを謝しつつ、「ひょっとして、途中リタイアする小原を、ヘリでポカラへ降ろすことも有り、と考えていたのでは」と、なげかけてみたところ、「そんなことはありません」と応えて呉れたが、隊長としてはいろいろの出来を想定するものだから、あり得たかもしれないと今でも思っている。

添付の写真は、この日、ヤク放牧の丘の中腹にてカメラに収めた高山植物。①小生の郷里多治見近辺では「筆草」と云い、「フデリンドウ」に近い仲間と思われる。日本で見られるものより花の色が鮮やかで、やや大ぶりであった。②エーデルワイスの仲間；ウスユキソウの仲間は種類が多く、ヨーロッパのエーデルワイスを小生は見ることがないので、これを特定出来ないが、「ハヤチネウスユキソウ」に近い花卉だが、茎がそれより長い様に思われた。いよいよ翌、翌々日に向けて最高の感動の日を迎えることとしたい。

(小原 記)



写真①



写真②

10月3日(土) 曇りのち雪 朝0℃

起床5:00—朝食6:00—出発(レダール4,200m)7:00→橋を渡って右岸へ(4,350m)7:40→8:25デウラリ8:40→9:15トロンフェディ(4,470m)9:40→11:00ハイキャンプ(4,800m)→昼食(11:45—12:15)→(高所順化のための散歩)→13:30無名峰(4,900m)

朝食はお粥とご飯、野菜炒め、目玉焼き、ふりかけだった。食欲も便通も

いつも通り、体調は良好だ。高山病の症状も全く出ない。同じ高度だったピサンピークのベースキャンプに登った時よりずいぶん楽になっている。

あいにく空はどんよりと曇っている。振り返ればガンガプルナがまだ見える。上部が雲に隠れて大きな氷河から下が見えている。いよいよ細くなってきたマルシャンディー川の流れに沿って進む。樹木がほとんどなくなって砂地の急な斜面にへばりついている草が紅葉していて美しい。放牧されているヤクがその草を食べている。やがて橋を渡って右岸を進むようになる。これまで何度も渡った鋼鉄製のつり橋ではなく、木製の猿橋タイプの橋である。

トロンフェディは大きな宿舎がたくさん建っていた。しかし人の気配が少ない。かつてはトロンパス越えの最終宿泊地として賑わったはずであるが、現在ではさらに先のハイキャンプに宿舎が建てられて寂れているように見え



トロンフェディのロッジ

る。休憩してキャンディーをなめる。

ここから道は左に直角に曲がり、宿舎の裏手の急な斜面を登り始める。つづら折れの苦しい登りだ。時々深呼吸しながらゆっくりと進む。いよいよ雲が低くなってきて時々雪がちらつき始めた。チャーメのあたりから何度か一緒になった大島青年が話しかけてきた。京都出身でボカラ在住、山の経験は全くないが無知と若さをエネルギーにして登っている。服装や装備もハイキング並である。重装備のノルウェー娘と仲良かったようだったが今日は一緒ではない。話が弾んで歌まで出てきたところで松尾隊長に「苦しい登りで大変な人もいるんだからあまりはしゃぐな」と、たしなめられてしまった。(翌日、この青年(34歳)も結局トロンパスを越えてしまった。)

11:00、ついにハイキャンプ到着。高度4,800mである。5年前に登ったキリマンジャロの最終キャンプであるキボハットと同じ高度だ。植物が見あたらない荒涼とした斜面に数棟の宿舎が建っている。テントが間に合わないので宿舎の板の間を借りて昼食。太いマカロニの味噌汁、ごはん、ソーセージとトマトの炒め物、キャベツ炒め。味噌汁は七味トウガラシをかけたらいいしかった。

昼食後、みぞれとガスの中を目の前の丘(無名峰)に登ってみた。高所順化のためである。残念ながら何も見え

ない。宿舎に戻ってティータイムにしてパルスオキシメーター計測。酸素飽和度76%、脈拍81/sec。良くはないがまずまずこんなものだろう。軽い頭痛を感じるがたいしたことはない。他の皆さんも多少の差はあるもののみならず元気である。夕食は5時から食堂テントでとって早めに就寝。なにしろ明日は起床が2:00で、出発が3:00である(キリマンジャロの時は12時出発だった)。食事は抜きで、朝食も昼食も弁当だという。雪がちらちらと舞っている。明日までに積もらないといいが… (大沼淳一 記)

10月4日(日) 小雪→曇り/雨→晴 気温0°C(出発時)

ハイキャンプ(4,883m)3:00→4:05
カルカのある所→5:05(5,250m)

→6:25トロンパス(5,416m)8:00→
11:24ヘディ 12:00→昼食(モモ&
ジュース)

→13:20ムクチナート(お寺巡り)→
14:20ムクチナート(3,700m)TS

①松尾 記

いよいよトロンパス越えに挑戦の日が来た。早朝2時のお茶とおかゆを各テントで食べ、3時に出発した。天気はあいにくの曇りで、満月がうっすらと見えている状態であった。昨日の雨はきっと上部では雪になっているに違いないと軽アイゼンとスパッツは携行

とした。3時にライトを点けてスタート。風が余り無く、雪も降っていないのが幸いである。

4:05、カルカのあるところで一休み。気象状態は変わらず。しかし、岩のうえには雪が出てきて、白くぼんやりと光っている。5:05、5,250mで休む。道上にも雪が積もっているようになってきたが、アイゼンを付ける程でもないので、そのまま歩く。6:25 トロンパスの峠が間近に見えてきた。



トロンパスの看板

その前で大安が「隊長、一番で行って下さい」と言ってくれたが、横一線になり手をつないで5,416mの峠に着いた。3時間25分かかった。その後、体調不良の小原、寺田、奥嶋そしてサブ・リーダーの宇都宮が約30分ほど遅れて峠に到着した。これで19名、念願の一人の落伍者もなく全員が峠に着いた。

信大旗を持って記念撮影をした。皆、嬉しそうだ。長い道のりだった。

峠のルンタもすっかり凍っていて白

く雪が着いている。北側のヤカワカン、南側のトロンピークは霧が流れて幻想的な姿をみせている。時々、霧の晴れ間に頂上が見えるようになってきたが、マルシャンディ川側もカリガンダキ川側も雲であった。満天の星の下でのトロンパス越えを期待していたが、雪のトロンパスも乙なものである。

岩津さんから預かってきた小川勝さんの遺骨を、トロンパスの小高い丘のところで、全員に撒いてもらい春寂寥を唄って慰霊した。

8:00 明るくなった峠を出発してカリガンダキ川方面へ下ることになった。風も少し出てきた。巨大なモレーンが幾つも積み重なっている広い谷を下っていく。9:50 緑の台地のところで一休みして携帯の朝食をとる、そこからムクチナートが見えたように思ったが、ジョン・コーラの右岸にあるジョンとプランの村であった。ムクチナートは左側の尾根の陰になっておりここからは見えなかった。

長い急な下りを休み休みしながらひたすら下る。11:24 ヘディーというバツィーに着く。ここで昼飯かと思っていたら、そうでなくさらに下ることになった。傾斜は徐々に緩くなり、膝の負担はなくなってきた。まだかまだかと思い始めた頃、シェルパがモモ（ギョーザのこと）とジュースを持って上がってきた。これで一息ついて大休憩となった。



13:20 ムクチナートへ到着。聖地を一目見ておこうということで、寺院の裏側から入って、水が燃えているところとヒンズーの108の水口を見学した。ヒンズーの人々はこの寒いのに沐浴したり水を浴びたりしている。聖地としては余りにお粗末だなといいながら門前が出る。土産物屋がズラッと並んでおり、皆さんアンモナイトとかを買ったようだ。浦正直君の死去を聞いていたので、我々は仏像を買った。

14:20 テント地着。11時間の行程であった。3時にはおでんが出てきて驚いたし、やっと着いたかとの実感が湧いてきた。皆さんお疲れ様でした。夜のビールが美味かった。

②奥嶋 記

前日、小雪の降る中、無名峰へ高度順応のため、往復（写真撮影含む約25分）した。

風邪が抜けず、夕食相変わらず満足に取れなかった。行動中は体調回復の



高度順応のため無名峰に登る

兆しがあったが、高度も影響しているのかも知れ無いと思われた。

朝、2時起床し、ヘッドランプをつけ、3時に出発した。考えた末（アイゼン持参指示があったが）、前日の小雪を考慮しアイゼンを持参する。

7:10 トロンパスに、呼吸・動悸は激しいがゆっくり歩いたお陰であり体力を消耗せず無事に到着。ここは小さな氷河を伴うピークからの緩やかな尾根筋にあり昨日からの小雪のためかうっすらと雪化粧したなだらかな峠であった。

前日、石山さんから頂いた高エネルギー剤（カーボショット）。これは高エネルギーで胃に負担がかからず、数分で消化吸収し、体内の血糖値を上げず安定した血糖値を維持、とするスポーツのエネルギー補強剤とメーカーは説明している（<http://www.shotsjapan.jp>）。

この補強剤を飲みながら余裕をもって峠に着き、快調とは言えないが、トロンパスでは難なくセレモーニーにも楽しく参加できたことは嬉しかった。

下山開始後30分ごろから猛烈な痛みが後頭部を襲ってきた、この痛みが約30分程度続いた。このときは風邪のせいと思い込んでいたが、軽い高山病に罹っていたようだ。最初の休憩が終わるころにはすっかり痛みは無くなっていた。

ムクチナートでの仏教・ヒンズーの

混成のお寺ではすっかり体調不良の体は回復し、両民族共有の聖地を楽しく見学できた。ヒンズー教の体を清める方法として歩きながらの清めの水の配置は始めてみる光景であった。

14時には宿泊地に到着したが、テント設営後のお茶の時間は風邪のせいかな？ 高山病の後遺症のせいかな胃が重く、キャンセルしシュラフにもぐりこむ、また夕食もキャンセルし眠りにつく。

③川崎 記

今日はいよいよこのトレッキングのハイライト、5,416mのトロンパス越えである。

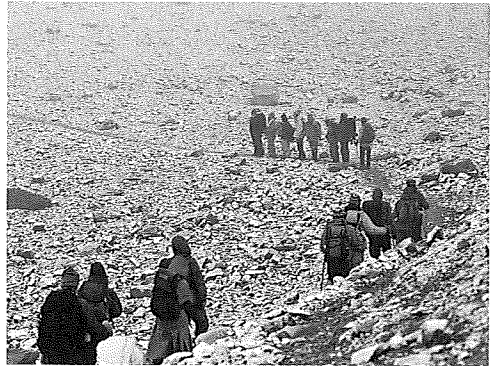
この日に備えて高山病対策にも取り組んできた。数日前からはダイアモックスなどの薬を飲み大量の水を摂っていたので頻繁に尿意を催して夜中に6回も起きることがあった。昨夜は小雪、みぞれ交じりの雨が降っていたが起床時にはやんで霧が立ち込めていた。

午後は風が強くなるとのことで早晩3時の出発である。気温は0℃前後で意外に暖かい。

2, 3日前から軽い頭痛があったが普段の風邪の症状か高度障害か自分でも区別がつかなかった。登り始めると寒さは感じないが初めの1, 2ピッチではさすがに頭痛と息切れを感じる。とにかくゆっくり歩きしばしば立ち止まり深呼吸をするいわゆるポッカ歩き

で進む。仲間存在をこんなに頼もしく有り難く感じたことはかつてなかった。

そのうち体が慣れてきて薄明かりの



トロンパスへの登り

中に峠らしい地形が見えてくるとずいぶん楽になっていた。トロンパス到着!! 峠は広く平らで気温2℃、積雪数センチ、時折霧がかかるが視界は広く素晴らしい眺めに感動した。

峠の北側には断崖を登ったピーク、南側にはなだらかなスキー場のようにさえ見える峰が見える。いずれも6,400mちょっと、すなわち峠からの高度差が1,000mとはとても思えない近さに見えた。ぼろぼろになって白く凍りついたタルチョと標識を見て5,416mの高さを実感した。19人の超還暦部隊が全員無事でよくぞ来られたものだ、ロバさん、ガイドさん、ポーターさん、仲間たち…皆さん有難うと何度も口の中でつぶやいた。

数日前から同じコースを前になり後になり歩いて話を交わしていた他の



パーティの人たちとも喜びを分かち合った。有難いことに茶店がありココアや食べ物に身も心も温まる。

下り始めるころはかなり晴れてこれから高度差1,700mも降りる遥か下方まで見えてうんざりするようもったいないような複雑な気持ちになる。

下りのほうが長くてむしろ辛かった。広い谷の中をぐんぐん降りて人里に着いた時は無事一区切り終えた安堵感、満足感に満たされていた。

後日知ったことだが、翌日からこの季節には珍しい雨が降り上では積雪1mもの大雪になりチャーメに帰るロバが死んだという。本当に幸運な1日であった。

④板谷 記

二時起床 三時出発 真っ暗な中昨夜からの小雨がヘッドランプで雪にかわっているのが見える。薄明かりの中サイド・モレーン越しにトロンピークが見える。だんだん傾斜が緩くなり白く雪で薄化粧したトロンパスに到着。

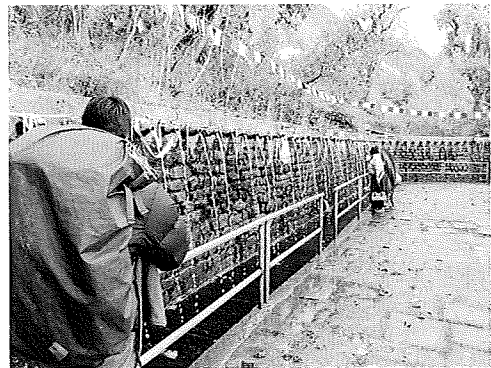
気温は零度以下 管理員のいる小屋で暖かいチャイを飲み体を暖める。

皆が揃った07:30全員でトレッキングの最高到着点(5,416m)記念撮影と小さなケルンを積み宇都宮観龍再拝で小川勝氏の散骨式をした。

天気は回復したが遠方の峰々は見えず遙か下方に今日の目的地ムクチナー

トが見える。かつては氷河で覆われていたであろうU字谷の中をひたすら降りる。1,000m以上降りてくると地表は高山植物で覆われ美しい花が見える、そんな所でポーターが持ってきてくれたモモ(餃子)の昼食を獲る。

ムクチナートには大きな扉で囲まれた仏閣(仏教・ヒンズー教)が有り中に入って見学、清水で手を洗った。閣内には聖地参りの巡礼者でいっぱい、顔は今まで見たチベット系で無くアリア系にみえた。テント地のラニボアには巡礼者運搬の車(ジープ)が目立つ。これから天気が下り坂なのか雲がたれ込みアンナプルナ山系の高峰は見えなかった。



ムクチナートの108の泉

⑤大島 記

いよいよ本トレッキングのハイライト5,416mのトロンパス越えの日を迎える。寝付けなまま1時には起き出し、準備を始める。寒がりの私はタイツに冬用ズボン、膝にはサポーターを巻き、上着は冬用シャツにセーター、

その上にダウン、さらに雨具の上下を着込み、頭にはフリースの帽子、靴下も短めと長めを2枚重ねる。ダボダボで格好悪いがそんなこたあ言ってもらえない。寒さ対策はこれで万全。

スタッフが用意してくれたおかゆと紅茶が有難い。体を温め、3時には出発。天気はあいにくと曇っており、粉雪が舞っている。真っ暗な中、各自ヘッドランプをつけて、いざトロンパスへ！

皆、黙々と歩を進める。暗いので、どんな道をどんな景色の中を歩いているのやら……。誰かのザックがピカピカ光っているのが目につく。4,925mのハイキャンプから5,416mのトロンパスまで約500mの上りだが、頭痛もなく高山病の症状も特にない。連日服用していたダイアモックスの効果か（副作用で夜中にトイレが近くなるとのことだったが、私には全くその兆候がなく薬が効いてないのかと心配したほどだったのだが）。膝・腰も調子いい。途中、休憩をはさみながら上っていく。

パーソナルポーターのダワさんはまだ日本語をうまく話せないので、トレッキング中、私が彼に日本語を教える代わりに、私は彼からネパール語を習うことにしていたのだが、5,000mもの道を必死で登っているときに、ダワさんが「ハァイ、いよ子さあん、1、2、3～はネパール語で何といいます

かあ」とのんびり聞いてくる。こちとらそれどころではないわいと思いつつも、悔しいから「エック、ドゥイ、ティン～」とハァハァ言いながら覚えてた数字を答える。

そんなことをしながら登っているうちに、空も白み始め、周りの景色も見えてきた。真っ白に積もった雪の中にポツンとひとつ小屋があり、凍りついた旗がバタバタと音をたてている。峠だ！ 誰かが「隊長、一番乗りを」と言ったが謙虚な松尾隊長は「みんなで」と、みんなで手をつなぎ横一列に並んで峠への貴重な一歩を踏みしめた（そのときのショットが皆笑みを浮かべ、可愛い♪）。ダワさんとも握手をかわし、登頂の喜びを分かち合う。



トロンパスのルンタも凍っていた

トロンピーク (6,201m)、カトゥンカン (6,484m)、ヤクワカン (6,482m) の頂が霧の中に見え隠れする。しだいに霧も晴れてきて、雪に覆われた山頂が朝日に照り輝き眩しいくらいだ。約3時間半の上りだったが、それほどき



つくは感じなかった（これも出発前に石山さんから貰ったエネルギージェル「carboshotz」のお蔭かな）。しかし、寒さ対策万全のつもりだったがじっとしているとやはり寒い。ガタガタ震えながら小屋でアツアツのティーを飲み、朝食をすませると、ようやく体も温まってきた。

トロンパスの小高い丘の雪の上に小川勝さんの遺骨を撒いた。小川さんもみんなと一緒にトロンパスへ来たのだ、きっと喜んでいることだろう。心安らかに眠られることを祈る。唱和した「春寂寥」の旋律が、何ともいえない物悲しさに胸に迫ってくる。

さて、いよいよ恐怖の下りだ。膝の弱い私は、上りよりもこれから先の1,700mもの下りのほうが恐ろしい。すっかり明るくなって、青空も広がってきた峠を下り始める。しばらく行くと、正面に聳え立つ山に雲がたなびき、遙か、はるか下に村が見える。この情景を目にしたときクラクラとめまいがしたものだ。ヒャ〜、これを下るの！？ と（ムンクの名画『叫び』状態）。日本では絶対に見られない光景。膝がもつだろうかと心配になる。しかし、上ったからには下らにゃならん。まあ、一步一步足を出していけばいつのまにか着くだろうと観念し、ストックを2本使い、急ですべりそうなガレた道を慎重に下り始める。そんな荒涼とした峠道にも、地面に這いつくばる

ように背丈の低いリンドウやエーデルワイスに似た花々が咲いており、長い下り道を応援してくれてるようだ。



ムクチナートへの下りが始まった

途中、珍しくゾッキョ（ウシとヤクの雑種）の隊列に出会った。エベレスト街道では荷揚げにヤクやゾッキョが使われていたが、このアンナプルナ街道ではロバしか見かけなかったのだ。彼らもあえぎあえぎ上っていく。下るのも大変だが、上りも大変そう。

朝が早かったので、おなかもすいてきた。お昼はまだかいなと思っていたら、途中でスタッフがモモ（蒸し餃子）とジュースを持って上がってきてくれた。やれやれとそこで一息つく。モモがピリッと辛くておいしい！ 空腹を満たし、再び歩き出す。

あちこちにタルチョがはためき、どうやらムクチナート（「百の泉」の意）へ着いたようだ。さすが、チベット仏

教とヒンドゥー教の聖地、ネパールの国内だけでなくインドからも訪れた多数の信者が寺院にお参りしている。信仰心のない私だが、何やら厳粛な気持ちになる。

聖地の寺院を巡って、14:30ようやくテント場に到着。少し右膝が痛み出してきた頃だったので、もう下らなくていいのだと安堵。3時のお茶の時間にはおでんが出てきてビックリ。みんなで頬張りながら、今日の快挙を褒め称え合う。私も何とか落ちこぼれることなく歩けたのでホッとす。

今日からダイアモックスの服用もなく、飽和酸素濃度を測ることもなし。禁酒令ももちろん解禁だ。夕食時にはサーダーからのビールの差し入れで乾杯！ 久しぶりのビールは極上の味だった。

長い長い下りの長い長い1日。膝をさすっているうちにクタッと寝てしまった。

★本日の歩数⇒28,981歩、消費カロリー⇒935kcal

10月5日(月) 曇り 朝5°C

ラニポア(3,700m)7:00→7:35 ジャルコット→8:20 キンガル→10:25 カグベニ

→11:40 エクリバッティ(2,740m)

昼食→ジョムソン(2,720m) Hotel Snowland

気持ちの良い目覚めであった。昨日

の早朝3時の出発と最大の難所トロンパスを超えた安堵感が久しぶりに深い眠りをくれたのだろう。今日はラニポアからU字溪谷のジョン・コーラをカグベニ(2,800m)へと一気に900mを下り、カリガンダキコーラ沿いにジョムソンまでの約6時間の行程だ。雲が切れればダウラギリ(8,167m)も見えるかも知れない。7:00出発。もう路上の土産物屋が手ばた織機でヤクの毛のマフラーを織りながら店開きをしている。ジョン溪谷を見下ろせば荒蕩たる砂漠で、所々水の湧き出るオアシスが村になっている。作物は赤ソバが多くトウモロコシ、ジャガイモ、麦等も作っているようだ。下からはムクチナートへの巡礼者が続々と登ってくる。インド系の人が多く、中には裸足の人もいる。馬で来る人、猛烈なスピードで砂塵を巻き上げ車で通り過ぎる人もいる。キンガル(3,280m)を過ぎると対岸の垂直の崖上に沢山の洞穴がある。住居跡？ 墓？ 登る道も見当たらないから自然の穴？ 若いガイドに聞いてみると、**ダライラマ**が亡命した時に住んでいた住居跡とのこと。その下には廃棄された村や耕作地の跡が見える。崖崩れのためか、それとも湧水が涸れてしまったのか、いずれにしてもギリギリの自然の平衡状態の中で暮らしているのだ、バランスが少し崩れれば生活出来なくなり出て行かざるを得ないのだろう。周りを見渡



ダライ・ラマも住んだという洞窟跡

しても ヘビノボラズ という棘だらけの灌木以外に何も生えていない。むしろ山の上の方が緑が濃い、たぶん雲の水滴が緑を育てるのだろう。昨日もトロンパスから4,900mでは一木一草無かったが、それから下で岩に苔が付きはじめ、草の上で休み、高山植物の花を撮りながら下ったが、今日は撮る花もなく休む時は岩石混じりの土の上だ。

10:25カグベニ到着、中世の雰囲気を残す城郭の村だ。長い間禁断の地であったムスタンやチベットへの入り口で昔は関所があったとのこと。村に入ると迷路のような入り組んだ細い道で、これでは敵が侵入してもすぐに搦め捕る事が出来ただろう。村の中心の小さなお堂の中にはお堂一杯の大きなマニ車があり、マニ車を回すと言うより我々がマニ車の周りを回った。マニ車は大きいほどご利益も大きいのだろうか、ピサン村には水車で回すマニ車もあった。ご利益は誰に行くの

だろう……などと思っはいけないの
だろう。5, 6軒の商店街には7イレブンやマクドナルドの看板も掛かっていたがオデンやハンバーグを売っているかは確認しなかった。10:45カグベニを出て向かい風の強い中をカリガンダキコーラ（黒い川）沿いの道を、あるいは広い河原を三々五々歩く。柴田さんが見事なアンモナイトの化石を拾う。11:40エクリバツェイ（一軒茶屋、2,740m）着、昼食後、柴田さんに刺激を受けて皆な河原に出てアンモナイトを捜す。今度は川崎さんが見つける。13:00出発、河原に出来た踏み跡の道を行く。対岸は大褶曲の地層でヒマラヤの造山運動のすごさを物語っている。15:50ジョムソン着、ジョムソンは大きな町で飛行場やhigher secondary schoolや山岳兵養成学校がある。この日はロバの到着が遅れホテル泊まり、久しぶりに風呂に入り洗濯をする。夜は早期帰国の池内さん、テライ平原の水質調査に行く大沼夫



カリガンダキ川の河原でアンモナイト探し

妻、他の隊のガイドに向かうブジェンドラとお役御免となったロバ隊の2人、計6名の送別会を行う。（河原記）

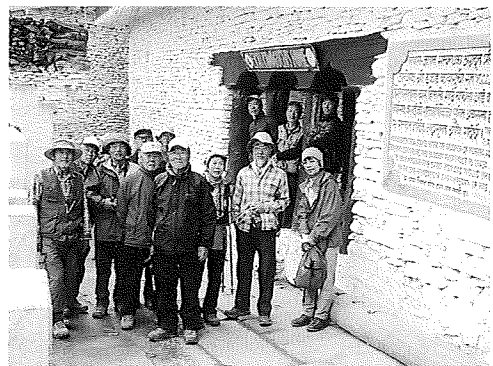
10月6日（火）曇り→雨 朝10°C
ジョムソン10：20→11：05 シャン→
11：45マルファ(2,670m)Hotel Trans
Himalaya

昨夜から降り始めた雨は、明け方も未だ強く降っていたが、明るくなってきて起きた時には雨は止んでいた。早朝の飛行機でポカラに行く予定になっていた池内さん・大沼夫妻・ブジェンドラ達のフライトは、雨で飛ばなかったとのこと。我々の出発も天気の様子を見ながら決めることになった。

8時頃に朝食を終えてホテルの外に出てみると、ホテルの前の飛行場のゲートには、飛行機で飛べなかった乗客のトレッカーやインドからの巡礼者たちがたむろしていた。ヒマラヤ周辺には前線があって、明日の天気も悪いということで、池内さん・大沼夫妻・ブジェンドラ達は、飛行機をあきらめ車で行くことになり、四輪駆動の車をチャーターして、皆に見送られ9時頃ポカラに向かって出て行った。

我々は、その後も暫くの間、ホテルの近くの雑貨屋などを覗いたりしてぶらぶらしていたが、空もいくらか明るくなってきて10：20に出発することができた。今日のコースは、当初の

予定通りジョムソンからシャンを通過してマルファまで、休養を兼ねた1時間半ほどの短い工程となっている。ホテルを出て、飛行場の滑走路を見ながら少し歩くとジョムソンの街はずれにでた。途中にMustang Eco-Museumと書かれたゲートがあったが、建物は丘の上にあつて道からは良く見ることができなかった。ジョムソンの街を出ると、道はカリガンダキの河原道となった。河原道は平坦で歩きやすく、車も四輪駆動車であれば走ることができる。道の途中には、りんごの木やユーカリの木が在る農家があつて、所々にとうもろこしやそばの畑があつたり、ロバが河原の草を育てているのを眺めながらのんびりと歩く。11時40分頃、マルファの村の入口に着くと、Delightful Apple Capital of Nepalと書かれたマルファの案内標識があつていた。今日の天幕地は、マルファ村の入口に在るゲストハウスの中庭で、他の宿泊客は誰も居なかった。昼食がで



マルファの河口慧海記念館で

きるまでの間、村の中を見学することになり、皆で河口彗海記念館やお土産屋を見て回った。マルファは、白壁の家々と村中の狭い石畳の風情がカリガンダキ中で一番美しい村といわれ、河口彗海がチベットに潜入する前に3ヶ月ほど滞在したところだとのこと。皆で入ったレストランで食べたアップルパイとミルクティが美味しかった。今日の天幕地のゲストハウスに戻って、昼食をとり、テントで一休みしてから、夕食前に再び村に出かけてみた。昼食前に行った時には入れなかった長い石段を上がったところのゴンパを見たあと、お土産屋を覗いて回ってきた。夕食を食べ始めた6時頃から雨が本格的に降りだした。夕食は天ぶらが出され、ゲストハウスで作られたアップルブランディーを頂き素晴らしい晚餐となった。アップルブランディーを何杯かお代わりしたあと、皆な幸せな気持ちになって8時前に雨の降る中を各自のテントに帰っていった。(坂本 記)

10月7日(水) 雨 朝9℃

マルファ停滞

夜半から降り続けている雨はますます激しく降っている。4時半ごろ今日の行動をどうするかサーダーを探していると、石山さんが荷物を纏めてロッジに避難していた。彼のテントは水浸しとなってしまっていた。5時に全テントを廻ってみると、殆どが大丈夫と

のことであった。6:00に全員ロッジ内に集合し、今日の天気では行動はとも無理と判断し、全員ロッジにてステイすることになった。

サーダーと相談して、明日晴れとなれば車をチャーターしてタトパニへ行くことにした。そうであれば日程としては予定どおりとなるわけである。

時間がたっぷりあるので、皆さんは本を読んだり、手紙を書いたり、またマルファの町までショッピングに出かけたりして各自が楽しんでいた。3時頃よりリンゴで造ったロキシーを飲みだし、今までのキャラバンのことやいろいろのことを話していると、とうとう夕飯となってしまった。



マルファでの語らい

今日は滝川さんの誕生日であるので、サーダーが気を利かしてケーキを焼いてくれた。そして、プレゼントまで用意してくれた。「北国の春」や「十人のインディアン」の歌をネパール語にふきかえておおいに唄った。

明日の天気が気になるがこればかり

はどうしようもない。今日の交信では第二チームのチュルーのBCは大雪とのことで、撤収を決めたとのこと。これも仕方ない。前日FIXを張った時点で、登頂は可能だったらしいが、5人全員で登ろうと次の日に延期したら、この悪天候となってしまった。でも、その心意気や良しとすべきである。これぞ信大山岳会魂である。

(松尾 記)

10月8日(木) 曇り→晴 朝10°C
マルファからタトパニへ
マルファ(2,670m)9:35→10:15土砂崩れ地点11:45
→12:00ツクチェ(2,590m)12:15→
13:00レテ(2,480m)→13:40ガーサ
(2,010m)昼食14:30(徒歩)
→15:30ルクサ(1,630m)→16:30ダ
ナ(1,440m)
→17:00(ジープ乗車)→17:40タト
パニ(1,190m)Trekker's Lodge

降り続いた雨もようやくあがって、いよいよ出発です。徒歩では予定を消化できないために、車で行くことになりました。サーダーが朝早くから、車の手配に奔走していましたが、我々は車が来るのを待つのみです。

南西の方角に、時々雲が切れると、そこに真っ白なダウラギリが姿をあらわします。ホテルの横を流れる川は、まだ増水したままですが、みんな思い思いにそのあたりを徘徊してしまし

た。

ここマルファでは雨でしたが、トロンパスは昨日、1mほどの雪が降ったそうで、われわれがその前に越えて来たというのは奇跡的なことだったといえます。その大雪で、第二隊は撤退を開始したということですが、第一隊は詳細はまだよく分かりませんでした。お役御免のロバ隊は、南回りで帰るそうです。

ようやくバスの手配ができて、9時35分にマルファを出発しました。マルファの街の中は道が狭くて通れないので、田んぼの中に一直線のバイパスが走っていますが、バスが横転してしまうのではないかと思うほどのぬかるみです。そこに行く途中で、バスがぬかるみにはまってしまっていて、脱出するのにしばらくかかりました。マルファの外れまで来た時ですが、今度はバスの前に羊の大群が道路を占拠していて、いっこうによける気配はないのです。一難去ってまた一難。苦労して羊を追い払い、通過しました。

「難」の後に難は続くものです。マルファを出て40分、ツクチェの手前で、今度は土砂崩れで通行止めです。対向車やこちらの先行車から運転手や乗客が降りて「道普請」が始まりました。日本なら、自分たちは何もせずに、市役所や工事事務所に電話が殺到してたいへんでしょうね。でもネパールでは、道を必要とする人が自分たち



で直して通過するのです。お国柄とい
えばそれまでですが、日本もかつては
そうだったのではないかなと思いまし
た。



やっと道路が通れるようになった

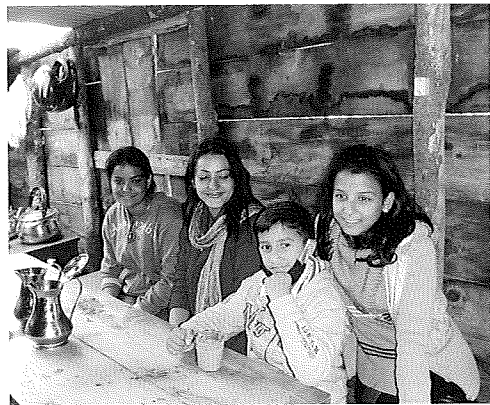
道普請の合間に、カリガンダキ川を
挟んだ対岸の山の上の雲が切れ、ニル
ギリが顔を出しますが、雲の流れが速
く刻々と変わってしまうのでタイミン
グを計って写真を撮らなければなりま
せんでした。

待つこと1時間半。ようやく道路の
修復が終わり、向こうから4駆のジープ
が一台降りてきました。こちらのバス
もエンジンをかけ、ようやく出発しま
した。

右に左に大きく揺れながらもバス
は、ツクチェ、レテなどを通過し、13
時40分、ガーサというバスの中継点
に来ました。インドからの巡礼の人た
ちでにぎわっています。

一応昼食ということではあるん
ですが、すでに皆さん決壊箇所
で待機している間に食べてしまっ
て、もう食べ

るものがなく、かといってここのバ
ッティで何かあるかと聞いてみたん
ですが、何にもないという状況です。
そんなことで、みんな手持ち無沙汰
で成り行きを見ているということに
なりました。ここでみんなの心を和
ませてくれたのは、若い美人の姉妹
でした。



ガーサの茶店の美人三姉妹

ここまでもひどい道でしたが、こ
こから先もこの数日の雨で道路事情
が悪いです。乗り換えのバスを待っ
ていたのですが、なかなか来ませ
ん。結局、「道が悪くて上がって来
れない」ということで、「手荷物を
担いで、1時間半ほど歩いて、下
りる」ということになりました。も
ともと歩いて下る予定の所です。

下るにしたがって大河カリガンダ
キ川がどんどん狭くなっていきま
す。「これがあのカリガンダキか
」と思うほど狭い溝のような所を
滝のように水しぶきをあげて流れ
落ちていく様は、ネパールの自然
のすごさ、不思議さを

感じさせます。

途中で休んだ茶店。そこで食べたチャパティ、これがたいへん美味かった。懐かしい炭火の七輪（コンロ）で油で揚げたものです。

タトパニから車が迎えに来るというのですが、これがなかなか来ません。そのおかげで、車なら一瞬にして通り過ぎてしまうところですが、歩くといろんなものが目にとまりました。それで気を紛らわせながら歩くしかありません。夕闇も迫ってきました。

迎えのジープに遭遇したのは17時頃になってからでした。人が乗っているので違うかと思いましたが、空車では来ないんですね。少しでも稼ごうというたくましさ。

宿泊地のタトパニに着いたのは、もう陽も暮れた17時40分でした。今日はテントではなくホテル泊まりです。標高が1,200m位にまで降りてきたためか大きな蚊が飛んでいます。タトパニとは温泉のこと。ここには温泉があります。その温泉に夕方皆さん入りに行きました。そこには蛍が飛んでいたそうです。 (杉本 記)

10月9日（金） 晴から曇り、夜に小雨 朝17℃

タトパニ7：55→9：40ドウルビンダ
ンダ→10：00ガーラ(1,700m)→11：
50シーカ(1,935m)昼食
→15：40ファラテ(2,270m)→16：30

チトレ(2,390m)New Dhaulagiri Lodge
TS

5：50起床 タトパニ Tatopaniの朝は晴れ。

7：00朝食、昨夜の温泉で癒されたためか、ロッジでの朝食の雰囲気は普段以上に落ち着きと穏やかさがありました。木立ちや花咲くロッジの庭を出て北方を望むと、そこにはニルギリ南嶺Nilgiri South (6,839m)の白い嶺が青空の中に見えました。今日から2日をかけてゴラパニ Ghorepaniまで標高差約1,600mの登りを行くことになります。11日のプーンヒル Poon Hill 3,198mの往復を除けば、このゴラパニ Ghorepaniまでの2日間がこの旅の最後の登りとなる。

7：55 タトパニ Tatopani 1,190m 発
本流を左岸に渡り、続いてゴラパニから流れ下るガーラコーラ Ghara Kholaの左岸に渡る。ガーラコーラ Ghara Kholaの谷は緑豊かで畑地も遠望され広く明るい谷である。

9：40 ドウルビンダ Durbindandaを通過する。まずまずの快調な登りでした。畑には大麻も散見され、ここでも子どもたちは「スイーツ」とせがむ。まだ、ダサイン祭りの中のため巨大ブランコ Lingee pingにも興じていました。私たちはひたすら足を進めました。

10：00 ガーラ村 Gharaの茶店で休憩となり、サーダーのディビさんから

ヤクヨーグルトのふるまいがありました。ヤクヨーグルトは新鮮でクセがなく美味しかった。心地よい登りの中、何やら村内放送らしきものが流されているが、内容は誰に尋ねても教えてもらえなかった。

11:50 シーカ Shika 着、昼食。まずまずの登りでした。私の足も膝も何とか気持ちについてきてくれている。ここで先の目的地のゴラパニ Ghorapani が混んでいるとの情報がありました。さあ、今日のねぐらはどこになるのかお楽しみです。相変わらず周辺の山の畑混じりの斜面は緑豊かで明るい。

13:50 シーカ Shika 発、雲が広がりツクチエピーク Tukuचे Peak 6,920m もダウラギリ Dhaulagiri 8,167m も見えず。シャクナゲの大径木の林を登り続けた。

15:40 ファラテ Phalate 2,270m 村の結婚式に遭遇する。その様子は老若男女総勢50人ほどが狭い広場に集まっていて、何故か主人公のお二人は神妙でもなければ嬉しそうでもない様子で並んで座っている、その周りを白い衣の男たちが打楽器に合わせて踊っている。ここで、なんと嬉しいことに旅人の私たちに山羊のカレーのふるまいがありました。このカレーの味は後々にも話題になるほど美味しかった。返礼として松尾隊長からミルクキャラメルが渡された。10分ほどの停滞でファラテ Phalate 出発した。



結婚式のふるまい酒を頂く

16:30 チトレ Chitre 着今日のテント場 New Dhaulagiri Lodge TS である。晴れているが雲が多くツクチエピーク Tukuचे Peak 6,920m、ダウラギリ Dhaulagiri 8,167m も姿なし。マリーゴールドのオレンジの花が揺れていた。ロッジはトイレの増設開設の日でもありました。しかし、このロッジの利用者は少なかった。やはり、賑やかなゴラパニ Ghorapani を目指す旅人が多いのでしょうか。静かなチトレ Chitre は申し分ないテント場でした。夕食までの間にもビールの宴があり、信大学士山岳会の連中は寸暇を惜しんで酒に浸るものと知る。

19:00 夕食をロッジの中でいただきました。21:00 就寝する。

雑記 出発前に石山さんから夜が長いから ipod のようなものの持参を勧められた。なるほどと思い IC レコーダーにお気に入りの曲や落語、お話をコピーして持参しました。そして、シュラフの中で聴いて眠りにつきました。

友人が山で聴くならナナムスクリーニがお勧めとのこと、これもなるほどと思いコピーしました、よかった。このICレコーダーを杉本さんは記録用に使っていたので流石と思い、何回か真似をしたが、やはり記録はメモ書きが主でした。 (瀧川 記)

10月10日(土) 晴→雨 朝3℃
チトレ(2,390m)7:50→9:30
ゴラパニ上村(2,874m)TS Green View Lodge

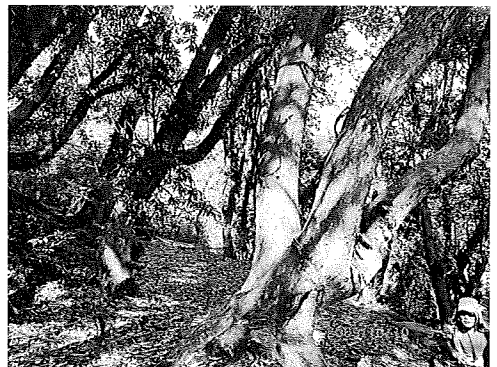
ここチトレは標高2,390m、さすが朝は冷え込む。前日少し雨が降った為かテントは濡れ、大地は朝露に湿り、村は静まり返っている。朝五時、久しぶりの晴天だ、山々に雲が掛かっている。深いカリガンダキコーラの谷の向こうに、ダウラギリの大きな山々が浮かび上がってくる。

雪を被った頂上部分は特にその白さを増して姿を現してきた。見渡せば、西にダウラギリ・ツクチェピーク、北にアンナプルナサウス・バルカチュリ・ヒウンチェリと、闇の中から目を覚ましたように起きてくる。やがて頂上部分に朝日が当たり、黄金色に染め始めた。なんとその姿の神々しい事か、静寂の中、凜として堂々とそびえている。ヒマラヤに来て、ようやくその山々のパノラマを目の当たりに見ることが出来た。

まだ夜の闇に沈んでいる村々や

木々、黒い海のような谷のはるか彼方に、最初に日の光を受ける白き山々は神の生ける領域、人々はそれを仰ぎ見る山、崇拜する山々なのだ、決して登る山ではない、正に信仰の山々なのだ。自然と共に生活し、自給自足の生活をする、その大いなる力には偉大な目に見えぬ力を感じて信仰の心が募ってくるのだらう。万物流転、静かに留まることのない谷々より雲が湧き上がってくる、ダウラギリもアンナプルナも朝日の一瞬の姿を見せただけで雲に覆われ始めた。

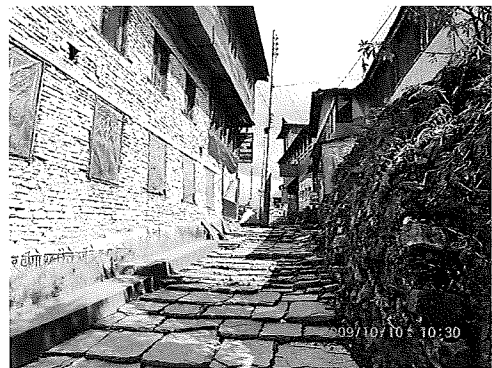
さあ今日はこのトレッキング中二番目の重要ポイントであるプーンヒルへの村ゴラパニへ行く日だ。その近くま



で来ているのでゆっくり時間の出発だ(7:50)。深い森林地帯に行く、ここは巨大なラリグラス(シャクナゲ)の巨木地帯、二抱えもある巨木が続いている。この地はどこもシャクナゲの巨木に覆われていたが、薪として伐採され標高の高いこの地帯だけになってしまったとの事。最近は自然保護の観点より灯油やLPガスが使用されるようになった。トレッキング中の燃料も灯油である。春になるとこのシャクナゲの花が咲き乱れ、桃源郷のようになる、その時期に一度訪れてみたいものだ。

3ピッチ目にはゴラパニ上村に到着(9:30)。時間は早い、早速洗濯やシュラフの乾燥等、思い思いの休養日になった。ゴラパニは石段で組み上げられた峠に10軒位いのロッジがあり、多くの観光客が集まって来る。アンナプルナトレッキングの銀座コースなのだ。ヨーロッパのトレッカーが多くなり、又中国のトレッカーも多い(中国語が聞こえてくる)、正に国際観光地の光景だ。観光客目的の土産物屋が店を構え、又雨露天を開き、国際電話も掛けられ、他に本屋や食料品店などの店があり賑やかだ。

皆は峠の店で見ただけショッピング、値切り交渉を楽しんでいるが、ミイラ獲りミイラになる事も、値切りが思い通りにゆくと買わざるをえなくなる場合も。売り込みも片言の日本語で慣れたものだ。又、ゴラパニ下村ま



で行き、おいしいロキシーとヤクのステーキでご機嫌な人達も。

三時のおやつにカンテンパパのゼリーを作り皆に振舞い食す。天気よかったのは昼間だけ、三時頃に雲行きが怪しくなり四時には雨となる、せつかくの洗濯物が乾かない、山々は雲に隠れ何も見えない。明日はどうなるのやら、旅の後半は雨にたたられている、まだ続くのか？

夕食はコックが時間を掛けた料理として、春巻きが出る。食事中に停電となる、国際観光地のこの地でも電気は心細い供給体制だ、雨で漏電停電か、送電線トラブルかなかなか回復しな

い。あきらめて早々にテントへ行く、明日は3時起床と早いので休むことにした。

雨がぽつぽつとテントにあたる、明日は一番の日なのに。晴天を期待しながら早めの就寝に就く。(柴田 記)

10月11日 晴 朝3℃

ゴラパニ3:58→5:10プーンヒル(3,198m)6:35→7:10ゴラパニ(朝食)

8:20

→11:00バンタンティ(2,210m) 12:40→15:30ヒーレ(1,430m) Susia Guest House TS

今日はプーンヒルへ行く日である。天気も良く期待できる。テントを3:58出発。

カンテラを点けて山路を登る。5:10プーンヒルへ到着。山頂には展望台ができており、お茶をのませる店までであった。

少しずつ人数が増えてきて、各国の言葉が飛び交うようになってきた。6:07ダウラギリの頂上に陽が当たりはじめ、ツクチェピークまで茜色になった。6:10東のラムジュンヒマールのところからご来迎がはじまり、山頂にいる人達から歓声があがった。西からプタヒウンチュリー、チューレンヒマール、ダウラギリ、ツクチェ、ニルギリ、アンナプルナサウス、アンナプルナI、マチャプチャレ、アンナプルナII、ラムジュンと続く山容は流石

に素晴らしく、声も無く見入ってしまった。

6:35山頂を後にして7:10ロッジへ。朝食を摂って8:20出発。いよいよ最終行程の下りにかかる。ひたすら続く石畳の坂道を下る。尾根道を下るのかと思っていたら、意外にも沢筋を下るのには驚いた。ナヤタンティを過ぎて、バンタンティへ着く。ここで昼食となる。晴れていればマチャプチャレ、アンナサウスが見えるはずであったが、すぐに雲が山々を隠してしまう。

12:40出発。またひたすら続く坂道を下る。ウレリを過ぎて、吊り橋を渡ったティクヘデユンガで休む。15:30ヒレのテント場にやっと到着。草つきの広々したテント場で最後の宿泊地としては良いところであった。今夜は打ち上げをやるとのことで、ロッジの前に薪を積んで準備をしている。夕食はニワトリを10羽潰したらしく、トリテキや肝煮など豪華な食事となった。

大島さんが明日誕生日とのことで一日繰り上げてお祝いをする事になった。石山さんも誕生日が9月23日であったので、同時に二人の誕生日をお祝いすることになった。楽しかった。

打ち上げは、衣類やその他不要になった品を寄付し、ボクシスをネパールスタッフに渡した。そしてチャン、ロキシーを飲んで日本の歌、ネパールの歌を全員で肩を組んで唄った。



トレッキング最後の仕上げで踊る

シェルパやキッチンボーイ、ポーターも皆嬉しそうだ。サードはじめネパールスタッフの人達は皆良くやってくれた。一人の落伍者もなくここまで来れたことを素直に喜びたい。

有難う。

九時にお開きとなり、そのままテントで深く寝てしまった。(松尾 記)

10月12日(月) 晴 朝9℃

ヒーレ(1,430m)7:50→8:45 マタンティ(1,150m)8:55→10:14 ビレタンティ(1,050m)

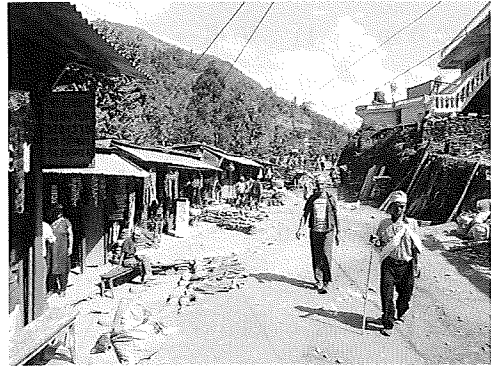
昼食12:15→12:45 ナヤプル(1,070m)

13:00→14:30 ポカラ(900m)

Hotel Base Camp Resort

5:30起床、いよいよポカラへ行く日となった。今日も晴れで皆の顔にも安堵感が広がっている。キャラバン最後の朝食をとり7:50出発。沢が大きくなる。ブルングコーラというらしい。10:14 ビレンタティーに到着。アンナプルナ内院から流れてくるモディコーラとの合流点だ。賑やかな

町である。ここで昼食。皆さんゆったりとした顔になってきた。スタッフ達と最後の記念撮影をした。ポーター、キッチンボーイ達とも今日でお別れだ。



ビレンタティの商店街

12:15出発。トレッキング最後の行程である。30分程でナヤプルの村に着いた。

ここからポカラまではバスとなり、長かったトレッキングも終了した。

バスに乗って、昔は歩いた道を一歩ポカラへ。マディコーラ沿いに走っていくと家が段々多くなってきた。ポカラの町に入ったのだ。人も多くなり賑やかになってきた。ペワタールの近くのホテルへ到着。第四チームの連中が暖かく迎えてくれた。それぞれが部屋に荷物を解いて、長いトレッキングはようやく終わった。ご苦労様でした。

第二チームの佐藤、山内も、マルシャディを飛ばしに飛ばして、今日ポカラに帰ってきた。総勢49名が揃っ

たことになった。(松尾 記)

第三隊早期帰国組、豪雨の中、ジョムソンーポカラからカトマンズへ脱出!

10月6日(火) 曇後雨

ジョムソン 9:00車→11:00 ガサ
車のりかえ 11:30車→

14:20 バイサリ 昼食 15:15 車
→16:00 ベニ 車のりかえ

16:20 車→20:20 ポカラ Base
Camp Resort Hotel

10月7日(水) 雨

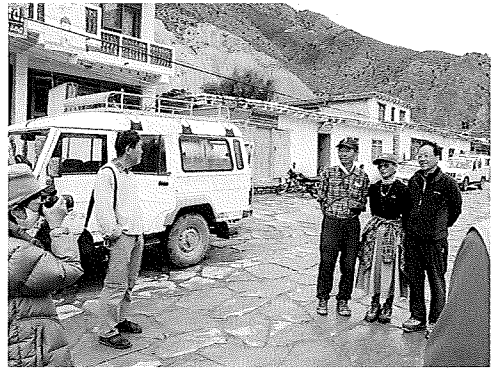
ホテル 8:00 車→8:15 ポカラ
空港 13:50 車→

20:00 カトマンズ Hotel Gangjong

6日早朝、いつものように目が覚める。昨夜かなりの雨脚で降った雨は、今は止んでいるようだ。しかし、いつまでたっても、飛行機の音がしない。6:30には、ポカラ便が飛ぶはずなのにといぶかっていると、果たして、松尾隊長と共にその便に乗るはずだった池内さんがドアの前に現れた。事態はすぐに呑み込めた。「本日欠航。明日もわからないから、一緒に車でポカラに行きましょう」というお誘いだった。大沼二人は、この日マルファ往復の後、明日ポカラに飛ぶ予定だったのである。決断は早く、「そうしましょ」と応えた。二日後にはカトマンズで現地NGOと共にネパール・テライ平原のヒ素汚染地帯で汚染井戸水の採取を

する予定だったので、その日までにはカトマンズに戻りたかったのだ。

朝食時、皆さんに急いで別れを告げる。何人かのガイドとは、涙もろい私がつったのか、つられたのか、涙の別れとなった。車(インド製?のジープ)には、やはりカトマンズに戻らなくてはならないブジェンドラとポーターの一人が同乗し、使用済みになったキャラバン荷物も載せられた。いざ、出発、2週間密着して生活を共にした仲間との別れは、去るものも残るものも、どちらも寂しげな表情に思えた。どちらも、「ダンニャバード、グッドラック」。



ジョムソンを出発する大沼夫妻と池内

カリガンダキ川を、車でひたすら下る。

マルファでは、12年前にポーターをしてくれたサドルバッグ君の家に寄りたと思っていたが、車はトレッキング街道と並行に造られたバイパスを通過、こんな緊急事態では寄る術がない。それでも、ツクチエでは、思い切つてブジェンドラ経由で、河口慧海記念

館に寄りたいと運転手さんに申し出たが、首が振られただけだった。何しろ、雨が相当降った形跡だらけなのだ。道はどろどろの泥道、まだまだU字谷の川幅は広く、支流も大きく迂回しながら越えるのだが、相当な水かさである。川に入るたびにマフラーを上向きにしては、道なき瓦礫や石の河原や濁流を、まるで運転手さんにだけは道が見えているかのように何の迷いもなく進んで行く。

車屋さんに営業範囲の制限があるのだろうか、それとも自主規制か、ガサで最初の車はUターンするため、車を交換した。次の車のオフィスが開くまでの間に、ブジェンドラとここで帰ってしまうポーターの二人が、ダルバートを食べた。実に美味しそうに、手で豪快に食べていた。なにしろ、ご飯もカレーも付け合せのアッチャル（日本で言えば、福神漬けみたいなもの）も全部おかわり自由なのは、ネパールカレーの嬉しい特徴だ。私たち三人はチャイを飲んで、雨の中、再び車中の人となった。

2番目の車は、路線便だったのだろうか、ガサを出発した10分後に道路の路肩で手を上げていた老女と中年女性が最後尾の荷物台に乗り込み、1時間半ほど乗って100ルピーを払ったように思う。ベニまでまだ1時間半はかかるというので、バイサリで昼食をとることにした。運転手さんは最初

不満気だったが、あきらめてブジェンドラと共に待っていてくれた。すぐに出来るというのでダルバートを注文したが、昼時をはずしているせいもあって少し時間がかかった。ダルバートとアッチャルは美味しく、おかわりをしたが、ライスは十分すぎるくらいに多く盛り付けられており、むしろ残してしまった。ちなみに、ダルバートは200ルピー、チャイは10ルピーであった。

すでに、V字谷に入っている。道なき河原こそ少なくなったものの、片側に深い谷を持つ幅の狭い道が多くなり、道路状況は同様かさらに悪くなっていた。低地の道は、道ではなく泥沼状態にあった。高地では、右側の崖肌がずるずると崩れてくるといきや左側は断崖絶壁で避けるにも避けられず、ただ思い切ってアクセルを踏んで一刻も早く抜け出すしかないというB級映画さながらのアドベンチャーコースを突っ走った。泥沼にバスがはまっても手のほどこしようがなく、だだ、「ごめんなさい、お先に」と、身軽な四輪駆動車はその側を通り抜けるしかない。

交通の要所、ベニには出発から7時間後の16時に着いた。ここで、キャラバン隊の荷物はコスモトレックの車に移され、ブジェンドラともお別れとなった。後日、カトマンズのコスモで一度だけあったが、山のブジェンドラ

の方が生き生きしていたように思う。ベニからの道路は比較的整備状況がよく、ポカラまでの何ヶ所かで通行料？を払う関所に寄ったが、乗用車は快適に走った。途中、マルドンガン辺りでがけ崩れのため、道路が封鎖されて修復が終わるまで、1時間ほど立ち往生したが、身の危険を感じずにはなく、ビスタリ！ 待つのみであった。立ち往生中の17時前頃から雨が降り出し、ジョムソンから11時間半かけてたどり着いたポカラももちろん雨であった。ホテルの食堂でもダルバートを注文したが、バイサリのダルバートの方に軍配が上がった。

7日、朝になっても、雨は止まない。フライト時間は9時半のため、8時にホテルの受付で集合したが、空港は閉鎖中という。ホテルのフロントが、開港したら連絡をくれるというので一旦部屋に戻った。どんなに空を眺めても、雨は止みそうにない。そうこうしているうちに、とにかく空港に行った方がよいということになり、10時前には空港に着いた。しかし、カウンターは開いていない。大方の人は、この豪雨ならば仕方がないとあきらめたのであろう。空港は比較的閑散としており、私たちのように、何が何でも今日中には目的地に着きたいという人のみだったように思う。やっと、11時にはカウンターが開いて搭乗手続きを完了し、搭乗待合室への入室検査も済ませ

た。

しかし、どこ行きだったのだろうか、飛んだのは1機のみ。12時を過ぎても、私たちの飛行機は飛ぶ気配がない。そもそも私たちが乗る飛行機が来ないのだ。昼食をとるために、レストランにいと、注文品が出てきた直後に、搭乗手続き係員がやって来て、「飛行機は飛ばない。すぐ、キャンセルの手続きをしろ」という。ほとんど同時に、コスモのポカラ事務所員も来てくれて、三つ巴で順番が決められた。まずは、昼食をとる。次に、搭乗キャンセルの手続きをする（搭乗券の控えは私たちには返却されなかったのに、持っているはずだから出せと係員に攻められ、一時激しく口論。結局、後で飛行機会社がコスモにキャンセル証明書を出すことで決着。口論の後の係員は「日本人、大好きだよ」とニコニコ顔。そして、14時前、激しく降る雨の中を乗用車でポカラ空港からカトマンズを目指した。

ポカラからは、ほぼセティコーラ沿いに下り、モディコーラを渡ってしばらく山の中を走ると、ドムレに到着、ここからはなつかしのマルシャンディ川沿いを走ることになる。途中のトイレ休憩も土砂降りの中だったが、トリスリ川との合流点を16時頃には通過、順調かのように見えた。しかし、この日もカトマンズまであと90kmという山中で土砂崩れの渋滞にあい、30分

ほど待つことになった。まあ、昨日の
カリガンダキ川の脱出行を思えばビス
タリ！ 気楽な気分だ。土砂がシャベ
ルカーで片側にのみよけられ、片側通
行であった。Hotel Gangjongに着いた
20時前には、もうほぼ雨は上がって
おり、ホッと安堵感に満たされた。

それにしても、池内さんにはお礼申
し上げる。大沼二人は、日本国内で
も携帯電話を所持していない。しか
しながら、池内さんの携帯電話での日
本やネパール国内への連絡で迅速且つ
適切な判断と処置がなされ、予期せぬ
事態にもかかわらず、予定通りの日に
カトマンズまで戻ることが出来た。お
まけに、この日午後から会う予定だっ
たNGOの人への連絡もポカラからの
車の中でさせてもらった（結局、この
豪雨によってテライへの道路も寸断さ
れ、調査は中止となった）。もちろん、

随時私たちの動向を追いかけてくれた
コスモの天津さんにもお礼申し上げ
る。そして、最後に、悪路や長時間の
運転に耐え、私たち三人の脱出行を支
えてくれた3台の車の運転手さんに感
謝と感激の拍手を送りたい。

(大沼章子 記)

大雨のジョムソンからの脱出

10月6日 (火)

9：00-11：30 ジープでジョムソン
(Jomsom, 2,720m)ーガーサ(Ghasa,
2,010m)、ガサで乗換え。

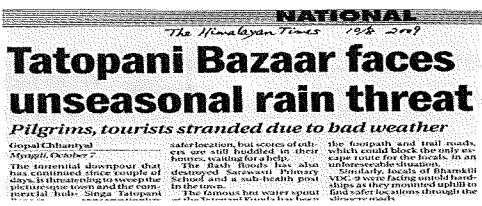
11：30-16：00 ジープでガーサ(Ghasa,
2,010m)ーベニ Beni, 830m、ベニで
乗換え。

16：00-20：30 大型バンでベニ Beniー
ポカラへ。

私のスケジュールは、昨日でトレッ
キングは終わり、本日は第3チームと
分かれて一人で飛行機に乗ってポカラ
経由でカトマンズへ帰る予定であっ
た。

しかし、朝から天気が悪く、雨と霧
で飛行機は飛んで来ない。サーダーの
決断は早かった。すぐにジープを予約
してくれた。松尾隊長もジープを薦め
てくれた。大沼夫妻は次の日に変え
る予定であったが、天気は思わしくな
く、声を掛けて同行してもらった。出
発時はまだ大雨ではなく、たいしたこと
になるとは予想していなかった。

ジョムソンを出てからしばらくする



A bus wading through a dirt track on the Palpa-Rampur stretch on Thursday.

と、土砂降りの大雨になってきた。ワイパーが最速で動いても、前が見えない。気温も低くてウィンドウガラスはすぐに曇る。未舗装の山道は大水、濁流、山崩れ、落石の中をジープは転がるようにしてバンバン走る。

頭が天井にぶつからないように、片手は天井に突っ張り、もう一方の手は天井の前の座席を突っ張り、乗っているほうも怪我をしないよう懸命の工夫が必要であった。

途中、泥沼の中で立ち往生する車も何台かあった。小型バスは乗客を満員に乗せたまま動かない。そんな中を障害物競走のようにジープは走り抜けていく。

左側がカリガンダキ川本流、右側が山で、沢水が濁流して流れ込んでいる川の中を突っ込む際には、ジープごと流されてしまうのではないかと不安がよぎった。恐ろしい場面は何回もあった。

この脱出劇はスリル満点。サハリレースのようであった。

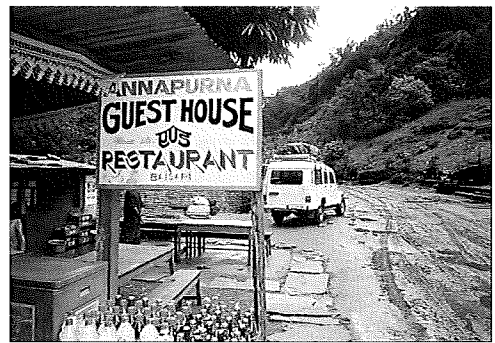
ジヨムソンからベニまでジープを2台を乗り換え、ベニからはトヨタの大きな車に乗り換えて、合計3台の車のリレーでポカラまで逃れた。ベニからは疲れて寝てしまった。途中がけ崩れ1箇所あり、1時間程度待たされた。

ポカラのリゾートBCホテルはよいホテルだった。

ジープの脱出劇でお尻が座席にバンバンぶつかって傷めたようで、夜、尻から出血した。翌朝は治り、たいしたことはなかった。

10月7日（水）

この日も雨が続き、ポカラ空港でチェックインしたにもかかわらず、フライトはキャンセルになった。午後2時過ぎに大津さんから電話があり、タクシーを頼んだからカトマンズまで出てくるように指示があった。また車に乗り、6時間かけて午後8時半にカトマンズ着。途中がけ崩れ2箇所あり。すっかり疲れた。（池内寛幸）



最悪部の山道を脱出し、昼食をとったバイサリ村の茶屋（10月6日15:00）。カレーライスがうまかった。後方は我々のチャーターしたジープ。最悪部では写真を撮る余裕がなかった。

各係報告

食料記録

柴田 武明

第3隊の食料は、御飯に味噌汁と漬物が基本で、日本人に合わせた料理内容になっていました。これは、長い旅の場合 慣れ親しんだ食事でないとう欲が出ないし、食べられない事による配慮でした。確かに毎日ダル（豆スープ料理）やダルバート（ネパールカレー）だけでは飽きてしまう、又 スパゲッティーも脂っこくなり、毎日の食事には向かない、その点日本料理は日本人に合っている、当然の事であるが。

しかしトレッキングで体調を壊す場合もあるので、食欲増進として、梅干や海苔の佃煮、フリカケ等、持込食料として持参した、これらは大変役に立ちました。

その他に、伊那食品より「かんでんばば」の製品を、信州ハムよりハム・ソーセージ類を寄贈して頂きました。これらの製品が貴重な蛋白源となり、食欲増進や活力になりました。

次に寄贈品と持参食料、感想をあげますと

やはり体調を崩すと食欲がなくなり、食べれなくなる。このとき役に

立ったのは梅干であった。みんなの体調を考え、御粥も用意してくれていたのて、御粥に適した嗜好品が一番大切な品揃えと思います。御粥はそれ自体では味が無く、食欲がわからないが、ふりかけ・のり・梅干一つあれば十分に食を堪能することが出来た。全行程でほぼ毎日フリカケか味付けのりが有ったため、食欲減退する事も少なく、体力保持に役立ったと思います。真に今回のトレッキングはフリカケさまざまでした。皆さんはフリカケは子供の嗜好品と考えていた人もいましたが、今回は見直したと言っていました。

そのほか、御飯と味噌汁、漬物の食事で、蛋白源が玉子だけで他に無く、持参したハム類が貴重な蛋白源となり、体力維持に貢献したのではないかと思います。

肉類が出たのは、第2隊の歓迎会で、にわとりか山羊を出すとの事でしたが、にわとりは手間が掛かるとして山羊になり、肉の筋の引き方が悪いのか、ひね山羊のせいだ、硬い肉でした。二回目は打上の日で、にわとり20羽の料理でしたが、なんだか量が少ないような感じ。

他に感じたことは、圧力釜を使って御飯を炊き、更にジャポニカ米を使っ

| メーカー | 商品 | 内容 | 個数 | 感想 |
|------|-------------|----------------------------|------------------------|------------|
| 伊那食品 | ポタージュ | じゃがいも | 2袋16人分 | 軽量で味も良く好評 |
| | | パンプキン | 2袋16人分 | 軽量で味も良く好評 |
| | | クラクチャウダー | 2袋16人分 | 軽量で味も良く好評 |
| | | コーン | 2袋16人分 | 軽量で味も良く好評 |
| | スープ | 寒天 | 6袋36人分 | 軽量で味も良く好評 |
| | | 野菜 | 2袋10人分 | 軽量で味も良く好評 |
| ゼリー | 寒天(中袋) | 1箱3袋 | 軽デザート用、いまいち | |
| 信州ハム | ボンレスハム | 450g/個 | 20個 | 貴重な蛋白源、好評 |
| | ウインナー | 130g/袋 | 40袋 | 茹でたほうが旨い良評 |
| | 焼豚 | 270g/個 | 19個 | 糸が取りづらい、好評 |
| | ミートローフ | 280g/個 | 11個 | 少し硬かった、良評 |
| 持参品 | 梅干 | 2kg | 御粥には欠かせない品、種が問題 | |
| | 緑茶少量パック | 8箱240袋 | キャンプ地に到着した時に飲む、便利 | |
| | 各種フリカケ | 1kg(小袋) | ほぼ毎日食す、一番の食欲功労者 | |
| | コーヒー豆 | 1kg | 現地手配品が有り(インスタント)使えなかった | |
| | 各種昆布佃煮 | 1kg(中袋) | 御粥に適品、食欲増進によい | |
| | のりの佃煮 | 500g(中袋) | 日本食に合う、少量包装がほしい | |
| | 味付けのり | 1kg(小袋) | 朝食用でほぼ毎日、最後湿気る | |
| | 板のり | 5袋 | 使い方思案中⇒手巻き寿司で大好評に | |
| | 粉末味噌汁 | 60食分 | 日本の味である、現地の味噌汁いまいち | |
| | とろろ昆布 | 1kg(中袋) | 嗜好で差が出た | |
| | 善光寺七味 | 2缶 | うどん、ソバにはこれがないと | |
| | 漬物(キュウリ・福神) | 1kg(中袋) | キュウリのQちゃんは好評 | |
| +α | 五倍だし醤油 | 1プラ缶 | 手巻寿司、てんぷらに活躍、栓が問題 | |
| | 個人持参 | フリカケ、乾燥梅干、南紅梅、コンソメ、アルコール類、 | | |

ていたもので、食べれる御飯になっていました、この点は助かった。野菜類はほとんど持ち上げていたようで、現地調達は、キャベツ・人参ぐらいで。玉子なども担ぎ上げでした、その為か、ゆで卵が腐った玉子になっていた人も在りました。

行く前に経験者から聞いた事は、生水・生野菜(サラダ)は食べないほうが良い、とアドバイスを受けました。最初のうちは恐る恐る食べましたが、最後には気にすることも無く食べまし

た。サラダは大丈夫ですと中野さんから聞きましたが、その通りでした。大腸菌が少しくらい着いていても、人間の体は下痢をすることはないので、人間の体は偉い。

持参する品物を検討する時、特に念を押したのは、だし醤油があるか？でしたが、ほとんどの物は現地手配出来ます、との事で、それでもと思い600gプラ缶一つ持ってゆきました。てんぷらの漬け汁が、ギョウザの漬け汁で、これでは食べれない。幸いこの

時に持参した だし醤油が役に立ちました。やはり醤油の使い方、だし醤油の使い方、だしの使い方、味噌の使い方がいまいちで、老人用の為と考えたくないのですが、味が薄い、だしが利いていないと感じたのは私だけでしょうか？

日本の料理もよいのですが、たまにはネパール料理を食べたくなりました。そして現地の人達が食べている食事に接してみたかった。それはどれほどの辛さか、香辛料の量は？ と知りたかった点です。チャンのお酒の味から想像するに、かなりのものと思いますが、それも話の種になります。

全体を通しては、食中毒になる人も無く、下痢の人もおそらくいなかったと思います。全員無事に下山できたことは喜ばしいことです。この期間で体重は約2kg減りました、これが健康的な食文化かもしれません、食べる分しか作らない料理方法で、日本の飽食の食文化とは違いました。朝 太陽と共に起き、大自然の中で農薬や肥料もほとんど使わない食物を食べ、犬や家畜たちと暮らすのは自然の姿です、我々は何かを忘れてしまったのではないか、それを思い出させてくれたトレッキングでした。このトレッキングを計画してくれた皆さんに感謝致します。

文章より写真が一番に物語るので、行動中の食事内容は、別紙編集してみました。

慣れないワード編集ですが、添付表と合わせて、ポカラまでの食事記録をまとめました。

以上

《会計報告》

大島 いよ子

* 単位はルピー Rs (1ルピーは約1.25円)

●収入 (19名)

一人当たり3,000Rs徴収

$$3,000 \times 19 = 57,000$$

池内さんから寄付 3,000

合計 60,000

●支出

飲食費 (明細は次頁★①参照) 33,425
スタッフへのチップ (明細は次頁★②参照) 20,600

その他 記念Tシャツ代

$$@350 \times 20 = 7,000 \quad 7,000$$

合計 61,025

●収支決算

$$60,000 - 61,025 = -1,025$$

(差額は松尾隊長からTシャツ代として寄付を頂きました)

| ★①飲食費明細 (地名：標高m) | | |
|------------------|---------------|-----------------------|
| 9/24 (ベシサル：760) | ビール | @ 250×10=2,500 |
| 25 (バウンダラ：1,310) | ミルクティー | @ 25×19=475 |
| (ジャガット：1,300) | ビール | @ 300×10=3,000 |
| | コーラ | @ 120×1=120 |
| 26 (ダラパニ：1,860) | ビール | @ 300×10=3,000 |
| | コーラ | @ 160×1=160 |
| 28 (ピサン下村：3,300) | リンゴ | @ 5×25=125 |
| | 熟大メイト充電代 | 200 |
| 29 () | 熟大メイト充電代 | 100 |
| 10/1 (ムンギ：3,330) | パン (@60～80) | 470 |
| 4 (トロンパス：5,416) | ミルクティー | @ 90 (税110)×19=1,710 |
| 5 (ジョムソン：2,710) | ビール | @ 250×15=3,750 |
| | ロキシー | @ 200×3=600 |
| | コーラ | @ 100×1=100 |
| 6 (マルファ：2,670) | 河口慧海資料館 | @ 100×16=1,600 |
| | ミルクティー&アップルパイ | @ 110×17=1,870 |
| 7 () | ドライアップル | @ 60×2=120 |
| 8 (タトパニ：1,190) | ビール&ロキシー | 2,300 |
| 11 (ヒーレ：1,524) | ビール | @ 300×14=4,200 |
| | ロキシー | @ 200×12=2,400 |
| | チャン | @ 180×9=1,620 |
| | コーラ | @ 130×1=130 |
| 12 (ポカラ：900) | ワイン | @ 1,000×3=3,000 |
| | | 小計 33,425 |
| ★②チップ明細 | | |
| サーダー | | 2,000×1+500=2,500 |
| ガイド | | 1,000×7+(500×2)=8,000 |
| コック | | 1,500×1=1,500 |
| キッチンボーイ | | 500×14=7,000 |
| ポーター | | 400×4=1,600 |
| | | 小計 20,600 |

以上、公金横領なし・明朗会計の大島でした。

医薬品担当としての反省

松尾 武久

寺田さんが不慮の事故で死去されたので松尾から報告いたします。

風邪薬、鎮咳薬、解熱薬が少なかった。もっと多く持っていくべきであった。

うがい薬も多く用意する必要があった。扁桃腺を腫らす人も多かったのでルゴールは用意すべきであった。鼻を

とおり易くする薬もあれば効果的であった。

胃腸関係では正露丸は効果があった。適量であったと思う。意外と百草丸は利用されなかった。キャベジンも利用する人がなかった。

外傷薬は殆ど利用されなかった。バンドエイド等は各自で持参している場合が多く隊で用意しなくても良いと思う。

大きな外傷がなかったから包帯等の

第三隊医薬品リスト総合表

| 症状 | 適応 | 製品名 | 隊購入 | 大学寄贈 | 寺田手配 | 残量 | 使用率 |
|--------|----------|------------|--------|------|------|-------|------|
| 呼吸器 | 上気道炎 | PL顆粒 1.0g | | | 200 | 120 | 40% |
| | | コルゲン | | 90錠 | | 0 | 100% |
| | 鎮咳剤 | メジコン | | | 100 | 40 | 60% |
| | | エスエスブロン | | 252錠 | | 0 | 100% |
| | インフルエンザ | タミフル | | | 一人分 | 0 | 100% |
| 抗生剤 | ニューキノロン系 | クラビット | | | 200 | 100 | 50% |
| | マクロライド系 | ジスロマック | | | 2回分 | 0 | 100% |
| 消化器 | 整腸剤 | 百草丸 | 3,000粒 | | | 3,000 | 0% |
| | | 正露丸 | | 400錠 | | 100 | 75% |
| | | ラックビー N | | | 90 | 60 | 33% |
| | | キャベジン | | 100錠 | | 100 | 0% |
| | 胃炎 | ガスター D | | | 100 | 0 | 100% |
| | | ロベミックカプセル | | | 100 | 70 | 30% |
| | 胃粘膜保護剤 | アルサルミン | | | 63 | 21 | 66% |
| 鎮痛剤 | 筋肉痛 | バファリン | | 160錠 | | 160 | 0% |
| | 鎮痛・解熱剤 | ロキソニン | | | 100 | 0 | 100% |
| 高山病 | アセタゾラミド | ダイアモックス | | | 200 | 100 | 50% |
| | 利尿剤 | ラシックス | | | 100 | 100 | 0% |
| | ステロイド | プレトニゾロン | | | 100 | 100 | 0% |
| | 降圧剤 | アダラートL10mg | | | 120 | 120 | 0% |
| 抗ヒスタミン | 軟膏 | リンデロンVG軟膏 | | | 3 | 2 | 33% |
| 結膜炎 | | ケンタシン軟膏 | | | 2 | 1 | 50% |
| シップ薬 | | バンテリンパット | 56枚 | | | 40 | 18% |
| 消毒液 | うがい薬 | イソジン液 | 240ml | | | 0 | 100% |
| | | スリブリスティック | | 20本 | | 20 | 0% |
| | | 消毒剤 | | 120袋 | | 80 | 33% |
| | | 消毒石鹸 | 3個 | | | 0 | 100% |
| | | 綿棒 | 200本 | | | 200 | 0% |
| | | 清潔ガーゼ | | 40 | | 40 | 0% |
| その他 | | 弾力包帯 | | 3 | | 3 | 0% |
| | | 普通包帯 | | 5 | | 5 | 0% |
| | | 絆創膏 | | 40 | | 40 | 0% |
| | | テープ | | 21 | | 21 | 0% |
| | | カットバン | | 80 | | 80 | 0% |
| | | アンクルクロス | | 4 | | 4 | 0% |
| | | 体温計 | | 2 | | 2 | 0% |
| | | 三角巾 | | | | | |

西郡医師持参薬品

| | |
|-----------|---|
| バンテリン液 | 1 |
| マイキロンS | 1 |
| ヒルドイド軟膏 | 1 |
| オイラックスA | 1 |
| テーピングテープ | 2 |
| バンドエイド | 3 |
| ピンセット | 1 |
| サンテドウ目薬 | 1 |
| ウエットタオル | 3 |
| くつつく包帯 | 2 |
| 三共胃腸薬 | 1 |
| 滅菌ガーゼ | 2 |
| ケトタックステープ | 3 |
| セイロガン糖衣 | 1 |
| タケダ胃腸薬 | 1 |
| 日焼け止め | 1 |
| ハサミ | 1 |
| クリップ | 1 |
| 桃の花 | 1 |

利用が無かったが、やはり万全の用意はしておくべきであろう。

トレッキングでは、各自が持病や風邪、下痢対策で用意していることが多いためそれほど隊としての薬品に神経質になることは無いと感じた。

高山病になる人も少なく、高所順応は上手くいったと思う。

汗をかいたらすぐ着替える。うがい手洗いを着実にする。風邪を引きそうだと思ったら、すぐに風邪薬を飲む。とにかくちょっとした油断が長引く結果となって体調の不調に繋がり、苦んだケースが見られた。

下痢や胃腸の不調は多くの方が訴えたが、これもあったかい湯を飲むようにして冷たい水は出来るだけ避けることで大分違うと思った。腹八分で胃腸

を労わる気持ちが大切である。

通信係の記録

池内 寛幸

第三チームの通信係は宇都宮さんでした。私はお手伝いしただけですが、記録をまとめておきます。

壮行会の後の8月末に金子さんが腰を痛めてしまい、第二チームの隊長として行けなくなったとの報告を聞き、暗然としていたところ、腰の痛い金子さんから急遽、通信システム機器の使い方を伝授するので集まってほしいと言われ、第二チームのメンバーと9月上旬に私の事務所（大阪）に集まって教えてもらいました。第三チームの正式な通信係は宇都宮さんでしたが、仙台から大阪まで来るのは大変だということで、代役で私がお手伝いすることにしました。

金子さんは、全体の通信システムを構築した責任者だけあって、見事な教え振りでした。痛い腰を我慢しながら、ほとんど一日かけて使い方を教えてくれました。

国際電話のスラーヤ携帯電話は、最初にGPSを使用して位置情報を出し、現地の電話会社を選択し、その後に国際電話番号をかけてつなぎます。簡単なメールもできます。国際電話ができるスラーヤ携帯電話がどれほど役に立ったかは、遠征に出てよくわかりま

した。金子さんには感謝しています。

スラーヤ携帯電話の係はジヨムソンまで私が担当し、その後本来の係の宇都宮さんが担当しました。

通信係としては、ほかに充電のための電気プラグも準備しました。ネパールはヨーロッパのプラグに似ていますが、少し幅が広く、そのままでは使えません。医学部から健康器具の取り付け調査の依頼を受けていたので、この健康器具の充電用にマルチプラグを準備してもらい、これをスラーヤ携帯電話にも転用しました。

第三チームには19名のメンバーがいるので、タコ足プラグも準備し、1度に10台の電気器具の充電ができるようにしました。これはトレッキング中、カメラの充電にも役に立ったと思います。

気象係として

板谷 真人

トレッキング中、朝出発時の天気(気温・湿度)を記録した。

既に雨期も開け秋に向かっていていると思いき高所での寒さに備え衣類等用意したが標高1,000m以下での行動は気温も30度を越し蒸し暑く暑さ対策が必

要だと感じ半ズボンで歩き有効であった。

最高到達点トロンパスではさすが気温も氷点下となり、うっすらとした雪の中通過したがその二日後雨が雪になりトロンパスで80センチの積雪になったと聞きその前に通過できたのは幸運の何者でもなかったと思う。

又その雨でマルファに足止めさせられたがトロンパス越え後の丁度良い休養になったと思う。

第三チーム気象観測実績表

| 日時 | 天気 | 温度 | 観測地 |
|-------|-------|------|----------------|
| | 観測朝6時 | | |
| 9/22 | | | 成田 |
| 9/23 | 晴れ | 26.0 | カトマンズ(1,400m) |
| 9/24 | 曇り | 22.0 | ベシサハール(760m) |
| 9/25 | 雨・曇り | 23.0 | ナディ上村(930m) |
| 9/26 | 晴れ | 20.0 | ジャガット(1,300m) |
| 9/27 | 晴れ | 15.0 | ダラパニ(1,860m) |
| 9/28 | 晴れ | 10.0 | チャーメ(2,670m) |
| 9/29 | 晴れ | 5.0 | ピサン下村(3,200m) |
| 9/30 | 曇り | 10.0 | ピサンBC往復 |
| 10/ 1 | 曇り | 8.0 | アンナII BC往復 |
| 10/ 2 | 晴れ | 1.0 | マナン(3,540m) |
| 10/ 3 | 曇り・雪 | 0.0 | レダール(4,200m) |
| 10/ 4 | 雪・曇り | 0.0 | ハイキャンプ(4,925m) |
| 10/ 5 | 曇り | 5.0 | ムクチナート(3,760m) |
| 10/ 6 | 雨・曇り | 10.0 | ジヨムソン(2,720m) |
| 10/ 7 | 雨 | 9.0 | マルファ(2,670m) |
| 10/ 8 | 曇・晴れ | 10.0 | マルファ(2,670m) |
| 10/ 9 | 晴れ | 17.0 | タトパニ(1,190m) |
| 10/10 | 晴れ | 3.0 | チトレ(2,390m) |
| 10/11 | 晴れ | 3.0 | ゴラパニ(2,860m) |
| 10/12 | 晴れ | 9.0 | ヒーレ(1,430m) |
| 10/13 | 晴れ | | ボカラ(900m) |

ヒマラヤの風

池内 寛幸

1 ヒマラヤまでの道

今までに登った最高峰は、ヨーロッパのモンブラン（4,810m、1999年7月）である。その後ずっとヨーロッパの山々を登り続けているが、ヒマラヤにはなぜか縁がなく、足が向かなかった。仕事がいつも多忙で、まとまった休みが取れるのは夏休みと冬休みしかなく、ヒマラヤの登山シーズンの春と秋に長期休暇を取ることができず、一緒に登る仲間がいないことも主な理由である。ヨーロッパアルプスでは、トレッキングは一人が多く、高山はガイド登山である。

今回、大学山岳部の先輩達が大勢行くとのことで、連れて行ってもらうことにした。ネパールは初めてであり、大自然の景観と人々の暮らしに興味を持ち、トレッキングの最高点はトロンパスの5,416mである。そこにはどんな風が吹いているのかな、といった楽しい期待があった。

2 世界一の山々とネパール人の貧しさ

ネパールに来て、はじめて見たカトマンズの街は、きわめて汚くびっくりにした。喧騒、雑漠、混沌の世界であ

る。交通渋滞はひどく、信号はあっても機能しておらず、ルールは守らず、ぐちゃぐちゃである。我々が到着した頃は国民的な秋祭りとのことで、人出と車は多かった。ホテルの前に門衛がいて浮浪者が入らないようにガードしている。

アンナプルナ街道をトレッキングし始めて、人々はとても貧しいことが実感できた。電気、ガス、水道などのインフラはまったくできておらず、工業は無いに等しく、一次産業がかるうじてあるといった程度である。ほとんどの人々は自給自足なのであろうか。最貧国グループからなかなか脱却できないようである。

特許専門家から見ると、この国も早く産業財産権法（特許法、商標法など）を作り、外国からの技術や資本を導入し、工業を起こさないとだめである。日本が明治初期にそうであったように、物まねでも、先進国企業の下請けでも何でも良い。工業を起こして外貨を獲得しなければ、人々は豊かにならない。今のままでは、いつまでたっても変わらないであろう。工業を起こ



して外貨を獲得し、インフラを整えないと、観光業も成り立たない。ヒマラヤ山脈という絶好の景観を生かし、観光業を発展させるためにも、経済的に豊かになり、自立することが必要であろう。

3 先輩・後輩のつながり

今回のトレッキングメンバーでは、私はほとんどの先輩とは学生時代には面識がなかった。それにもかかわらず、同じ釜の飯を食ったような気分になり、昔からの仲間であったようなつながりと親近感があった。大学山岳部の経験はありがたいものである。大学山岳部の時代には、上下関係は絶対で、先輩と対等に話ができることはなかったが、今になると年代が離れていても仲間のような感じで付き合い、信頼感も強く、毎日気心の知れた仲間とトレッキングするのは、楽しいことであった。

4 トロンパスの風

最高地点トロンパスの風は冷たいが心地よかった。ヒマラヤの風はまた格別である。山に抱かれ、自然と同化できる幸せは言葉には尽くせない。ここまで来た甲斐があったというものである。

到着時はまだ夜が明けきらず暗かったが、だんだんと明るくなり、白銀の

世界が開けてきた。ガスに覆われ、雪も降っており、視界は悪かった。峠の大きなケルンの前で全員並び記念写真を撮る。標高5,416mの銘板を入れた写真は貴重であった。私にとって、次にまた来る機会は多分ないであろう。二度と来れない峠に少しでも長く居たかった。小さな茶屋で温かい紅茶を飲み、その後、峠のコルから少し登ったところで、故小川勝氏の慰霊祭と散骨式を行い、春寂寥を歌って故人を偲ぶ。ここまできて春寂寥を歌えるのは、これまたなんと幸せなことであろう。

時々ガスが晴れ、上方のトロンピーク6,201m、ヤクワンカン6,482mに続く氷河がすぐそこに見えてきた。頂上まで半日もあったら往復できそうなゆるやかな傾斜が続いている。そのとき、ヒマラヤの風が語りかけてきたように感じた。「また登りにおいで」



トロンパス5,416mのケルンの前で。後方は茶屋とトロンピーク6,201mに続く氷河。

『山登り、海外トレッキング』を3倍楽しむ

石山 駿

40歳代の後半から山登りを始めるようになり単独行か少人数（時には妻と）で奥美濃、東濃の山々を訪ねたり体力に任せては北アルプスの山々にもよく足を運んだ。

私の山行の必携品はカメラ、スケッチブック、ハーモニカである。

カメラでは専らパノラマ写真作りに執念を燃やしている。

今自宅の部屋には150cm大にした横長のヒマラヤのパノラマ写真を壁に張り出して眺めている、そしてまだ順番待ちのパノラマ写真が幾つも出番を待っている。

デジカメを使うようになってからはパソコンの中でパノラマ合成出来てしまうのでまことに味気ない。フィルム写真の時のように1枚ずつ切って張り合わせる作業の時間こそが至福の瞬間であり、そのうえ出来上がりもアートのようになるというものだ。

スケッチブックでは山の印象をイメージとして捉えておくために短時間の描写を心がけている。

そして海外のトレッキングでは現地では出会った人々の顔をスケッチしてプレゼントすることにしている。私の方はカメラに記録しておけばそれで十分である。

ポーターやガイド、時には村の子供達、皆とても喜び、いつも順番待ちの盛況ですぐに仲良しになれるし、トレッキングの楽しさも倍増する。

ハーモニカは退職して2年後から、近所にすばらしい指導者が居られるのを紹介してもらい習い始めた。月2回のレッスンをよくサボる受講生だが根気よく、丁寧に教をいただいている。

平日の美濃の山なら人ひとりに出会うこともない時が多く、山頂を独占して心ゆくまで音色を風に乗せることが出来る。

小さくて軽い楽器なので海外でも愛用している。日本の歌を紹介するには便利だし、現地の人たちと交流を深めるにはとても役立っている。

2007年11月に松尾さん、大島さんと参加したネパールのゴーキョピークトレッキングで、登攀の苦しみで背中に引っ付きそうになっている肺に、地上の半分ほどしかない空気を懸命に送り込んでようやく5,000mを越える頂上に立つことができ、吹いてみた。

エベレストを間近に望みながら日本の歌がネパールの風となって眼下の氷河と山々を吹き渡っていったらと想像するだけでも幸せな気持ちになれ

た。

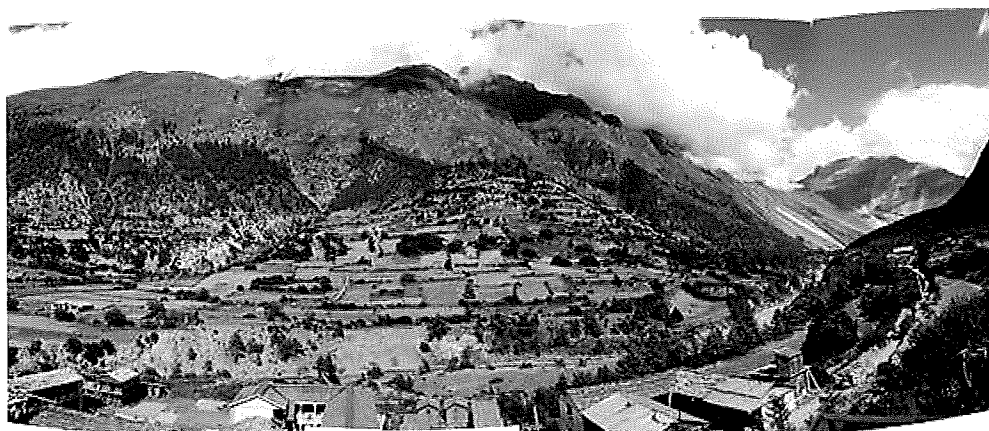
吹き、吸うことを交互させながら奏でる楽器であればこそこの高度でも可能なわけで、吹くだけの他の多くの楽器ではまず無理だろうと思われる。山にハーモニカはととてもよく似合うと私は自負している。

そして、トレッキングの最も大きな

仕上げは出会った風景を陶板に焼き上げて表現することである。

ひとつのトレッキングを終えると半年はこれらの作業で楽しみつつも時間が費やされてしまう。

いつの日かこれらの成果を小さな画廊で披露して、山好きの人達との楽しい時間が持てたらと願っている。



場所 ピサン村全景

撮影日 9月28日

コメント ピサン村へ入ってくる途中に出会った巨大な岸壁には息を呑んだ。滑（ナメ）るようにすべり降りてくるスロープからは威圧感を感じられ無い。そして、ピサン上村とピサン下村を取り巻く時空間の落差には考えさせられた。河沿いのロッジが連なる風景が河を跨いで上村へ侵食しないことを祈りたい。

雑感（靴のこと）

板谷 真人

カトマンズで手荷物が未着で明日からの行動は履いていった靴で歩くことになった。

未着の荷物の中にはトレッキングシューズと高所で履く愛用の登山靴と軽アイゼンもあり先のことを考えると心配で寝られなんだ。

コスモトレック（旅行社）に頼み足に合う靴を買ってポーターに持たせ後から追い付いてもらえるようお願いして出発したが、二日後には受け取れた。

靴のことが気になり通過する村の売店で見たが軽くて良さそうな靴が5,000ルピー前後で売られていた。

届いた靴（Black Yak韓国製3,600ルピー）は小生がいままで履いた事のない大きなサイズであったが靴下の調整でトレッキングが終わるまで使用した。此がすこぶる調子よく楽しくトレッキングを続けることが出来た。

大きめの靴は下りには特に有効でトロンパスからムクチナートやゴラパニからヒーレ、ナヤプルへの下りでは快

調だった。ただ足に比べて大きすぎるので踵を引っかけそうになった。

トレッキング中に紛失した荷物の保険金がいくら取れるか話題となったが最終カトマンズで受け取れたので保険金は取れず愛用の古靴に成田ーカトマンズを往復させた結果となった。

つまるところ航空機利用の旅で大切な物は預けないで身につけて移動するのが肝心と言う教訓を得た。

それにしてもこの度のトレッキングは今まで想像もしなかった大名旅行で幸せな思い出をいっぱい作れた楽しい旅であった。



トロンパスの同期三人



「なますって」ものがたり

宇都宮昭義

山での挨拶「こんにちは」、ネパール語では「ナマステ」、丁寧に云う時は「ナマスカーラ」と教わりました。いつも元気な挨拶だけが私の身上、会う人々、子供達・ロバ・ヤク・羊・犬・誰と会っても明るく声掛け「ナマスカーラ」、ところがまだ馴染まない入歯で舌が動かず「ラ」が出ないうえに訛りも少し出る、「なますきゃーれい・なますてえーい」とネパール語とは一寸違う。ガイド・キッチンボーイ・果てはチームの皆様方から色々治して貰ったが「ナマスカーラ」は出てこない、それでいつしか付いた名前が「なますっておじさん」。おかげさまで手帳にはガイドやキッチンボーイから教わった多くの単語「ダンニヤバアド・パニディノス・パイサチャイナチャイナ・タカイラギヨ・バイハルチャーニ」が残っています。すでに意味や発音を忘れた言葉ですが、次にネパールへ行く時は一つ喋って皆様をビックリさせようと想像するだけでも楽しいし、その時は決して「ナタデココ」は使いません。

今にすればトレッキング中の思い出は全てが「じすいず・なますて」、一つ一つが物語。

香港空港では上海肉ラーメンを食べ

た、当たり前だが上海味か？ 値段が高かったから美味しい事にした。支払いは円でも可能で何を買っても千円単位、ミネラルウォーターは一本千円、二本千円、三本千円、調子に乗って四本買ったなら二千円。

ダサイン祭りの期間中に各地で見かけたブランコ、長い竹を組んで作った「ピン」を天まで届けと漕いで遊んでいる子供達の歓声、走る車にしがみついて車を叩き大声を出している泥素足に草履を履いた少年車掌の誇らしげで活き活きとした眼差し、二歳位の違いで無邪気さと逞しさの差は何なのだろうか。

移動手段は脚で歩くしかないインフラ、道端では婦女子が円座になって手ハンマーで小石を砕き骨材を作っている。どこでも通じる携帯電話、村々にあるインターネットバッテリーと衛星TVのパラボラアンテナ、そのアンテナと間違えそうな太陽光熱調理器、三歳から英会話教育、衣食住の慎まじやかさ、仏教・ヒンズー教が混然として存在しどちらにも敬虔な信者が多数集まっている。そんなこんながごちゃ混ぜになっていて、10日も経つと当たり前に見える不思議さ。

頭に飾りをつけ荷を背中に何か誇ら

しげに歩いているように見えたロバ。仕事が終わったキャンプ地では頭を垂れて首から下げた餌袋から黙々と食べていたロバ。ハイキャンプの小屋の陰で強い曇混じりの風雨に身をそばだてるようにたたずんでいたロバ。仕事が終わったの帰り道トロンパス越えが出来ずに倒れたというロバ。そんなロバ達との別れの朝、良く働いてくれたお礼にトウモロコシでも与えてほしいと小銭を渡したら、ロバ使いは戸惑いながらもニコッと笑って小さな守り札を首から外して私にくれました。いま尺八袋に付けたこの守り札が、ネパール土産で一番貴重な思い出品となりました。

ポカラでは葛西さんで行ったイタリア料理店でピールの味は忘れられません。隣に座ったイタリア家族のすばらしい食欲には驚きました。街角の笛売りに尺八を聞かせたら商売道具の笛を吹き出して、期せずしての吹き比べ、そこで入手した龍の彫が入った長い笛は山形の尺八道場に飾ってあります。

バラドプールから乗った小型飛行機、窓から見えるヒマラヤに高揚しながらふと翼のリベットを数えたら、アラアラ数えるのではなかった。所々が取れている。胃が痛くなり我慢しきれずカトマンズ空港で飛び込んだ有料トイレは小銭が無くて五百ルピー。埃とバイク・車の騒音の中、ダルバー

トからギャンジョンホテルまで乗ったリクシャー（人力車）は二十ルピー。気持ち良く次々と車列を追い越す中年のリクシャワラーと、片言英語で判ったようで判らないネパール政治談議。ひよっとしたら相手はカトマンズの観光案内をしていたのかな？ 今となっては判らない。

一年以上の準備期間があつて満を持して参加したアンナプルナトレッキングは、寂しくも「宇都宮ず総入歯」と「寺田ずインプラント」の歴然たる差を確認した旅でした。9月6日に上前歯9本を折って、二週間後の出発に間に合わせる為、まだ大きく腫れている8日に型を取り18日に完成という、作った歯医者本人が驚いた突貫工事で完成した総入歯。19日の1回きりの噛み合わせ調整では、物を噛む時に痛むのは当たり前とは帰国後わかった事。皆様が美味しかったという行動中に度々出たネパールリンゴ、ナイフで細かくしても噛むのが痛くて食べられない私を見て、同情してくれたのか寺田さん、わざわざ目の前に来て大きく口を開いて「宇都宮、インプラントはいいぞー、少し時間は掛かるけど日本に帰ったら作るといいぞー」と言いながらリンゴを丸かじりして見せてくれる。私は「歯槽膿漏にインプラントは駄目なのですよ、リンゴがあると判っていれば卸し金を持ってきたのに」と白湯を飲んで対抗するのが精一杯でし



た。他にも羊、鳥、野菜炒め、ハム・ソーセージ、総てが細かく切って丸呑みでは味も素っ気も有りませんでした。その様子がよっぽど酷かったのでしょうか、帰国後数人の方から「歯は治りましたか」との心配のお手紙を頂きました。

帰国してすぐに歯医者の方へ、チョコチョコと調整すると一発で痛い所が治ってしまいガッカリするやら嬉しいやら。歯を折って入歯を作る時は歯茎の腫れがひいてから作り出し1月半は掛けるとか、2週間で作りあげ調整も都合2回で済ました吉中先生、自分の腕を見直したとか。でも時すでに遅し、ネパールリングも、プレムコックさんがトレッキング中の節目々々に作ってくれた晴の肉料理も、チトレの結婚式で振舞われた羊肉も、カトマンズでデヴィさんの店のネパール手料理もなにもかもここ日本では味わえません、残念です。

入れ歯の話でもう一つ、自分の気に入った音を出す為に歯に鑢を入れて隙間調整をする人が居ると聞いてはいましたが、総入れ歯になると尺八の音（ね）が全く変わるといふのは、経験してみても初めて解かりました。何とか慰霊祭に間に合わせたいと思い、トレッキング中は恥ずかしさを振り切つて慣らし吹きを続けた。始めは何の音（おと）も出ない、音が少し出だしたなと思つても低い音は苦しいし音程が一定しない。9月30日朝、とても本曲

にならない、佐藤君・片岡さんには申し訳なかったが、尺八を持たずアンナプルナⅡ峰BCに上がる。10月3日、ハイキャンプ無名峰で標高が高くて息が薄いせいなのか音も出ない、もどかしい。10月6日、標高が下がったジョムソンで息が厚くなり音が出る筈なのに、まともに吹けない。トレッキング中に行き交った人々には、日本の尺八は変な音が出る代物だと、変なイメージを与えてしまった。出ない…出ない…音が出ない、吹けない…吹けない…本曲が吹けない…。

10月8日夜、タトパニのロッジでマルファにて購入した「オンマニベメフン」を首から下げて鏡を見てふと気がついた「総入れ歯だから歯並びが綺麗になって、息の出方が変わったのかな」。尺八を当てる位置と角度をいろいろ変えてみた…あつと驚くゝなますておじさん、河口慧海の御徳か、巡礼へのお布施を1ルピー・2ルピーと積んだ御利益か、いきなり納得のいく音が出た、有り難い。翌日からは慣らし吹きのたびに面白いほど音が良くなり、ポカラでは笛売商人との笛と尺八の吹き比べ、ジュゲディの慰霊祭では小川さんに不義理をしないで済みました。帰国して導師から本曲の指導を受ける「少し味が出てきた、がんばりなさい」と30年稽古続けて初めてのお言葉、災い転じて福となす、本当に有難い「はなし」です。

雑感あれこれ

大島いよ子

2007年4月、30年間憧れたエベレストを初めて見ることができ、大感激！すっかりヒマラヤ熱に罹ってしまい、それ以来ゴーキョ、カラパタルとエベレスト街道を歩いてきた。たまたまゴーキョのトレッキングで松尾隊長と出会い、帰国後も国内の山に何度かご一緒させて頂いたご縁で、今回のツアーへのお誘いをうけた。筋金入りの山岳部OBとのトレッキングなんて恐れ多いなと思いつつ、アンナプルナ街道はまだ歩いてなかったのので、参加することにした。

出発までにそれなりの山歩きを心がけたが、8月の穂高縦走後に膝が炎症を起こし水がたまってしまった。明らかにオーバーユーズ。慌ててメンテナンスに集中したが、膝・腰に不安を抱えながらの出発となった。

●最も辛かった日

今回のトレッキングで最も辛かったのは、5,416mのトロンパス越えでも、ムクチナートへの1,700mの下りでもなく、歩き始めてから3日目の日だった。ジャガットからダラパニまで、灼熱の太陽を浴びながら歩きに歩き、何と行動時間11時間！暑くてカメラザックが重く、腰が痛くバテそうに

なった。17時頃到着したカルテがその日のテント場かと思ったら、何とまだこれから1時間も先だという。思わずのけぞってしまった。

(翌日からパーソナルポーターをお願いし、それ以降は快適なトレッキングとなったが)

●エベレスト街道とアンナプルナ街道

荷揚げに、エベレスト街道ではヤクやゾッキョのウシ科、アンナプルナ街道ではウマやロバなどのウマ科の動物が使われていた(なぜだろうと思いつつまだ調べていない)。また、エベレスト街道では棚田がほとんど見られなかったが、アンナプルナ街道では天まで続くような素晴らしい棚田が広がっていた。さらに、エベレスト街道には車道がほとんどなかったが、アンナプルナ街道ではあちこちで道路を造成中で、ムクチナートから先は車道が整備されジープやバス等が走っていた。そのせいかアンナプルナ街道のほうが物流が盛んで、生活も豊かに感じられた。

●携帯電話

今回のトレッキングで驚いたのは、ガイドたちがほとんど携帯電話を持



ち、それで連絡を取り合っていたことだ。3年前はほとんど持っていなかったのに、その普及はめざましいものがある。電線を通す固定電話より電波でつながる携帯電話のほうが、便利なのだろう。でも、あの高い山々のなかでよくつながると不思議に思った。

●残念だったこと

トレッキング終了後のチトワン国立公園でのサファリツアーが諸般の事情で催行できなかったのは、まことに残念だった。アフリカのタンザニアやボツアナのサファリで見た動物たちとはまた違う、ベンガルトラやインドサイとの出会いを非常に楽しみにしていたのだが。山だけではないもう一つのネパールの顔を見そびれてしまった。

●強力なサポート

大きく体調をくずすこともなく全員がトロンパスを越え、無事にトレッキングを終了できたのも、サーダーはじめガイドやポーター、コックやキッチンボーイのサポートがあってこそ（道路補修まで手助けしたのは驚いた。ガイドのダワさんは手に血マメができていたほどだ）。改めてスタッフに感謝。そうそう荷揚げのロバさん達もありがとう！

サーダーのディビィさんは、あの細い体であちこち走りまわり、身を粉にして働いていた。毎日の昼食場やテン

ト場探しは人数が多いので本当に大変だったことだろう。また急遽ヒールでの誕生会を設定してくれたり、その細やかな心遣いには頭が下がる。ディビィさんの功績や大である。

実はディビィさんとは、偶然にも出発前の6月に赤岳鉱泉に宿泊した際に出会っていた。そのとき、コスモトレックのガイドで信州大学のトレッキングに参加すると伺った。日本語も達者でとてもしっかりした方だなとは思ったが、まさかサーダーとしてこんなにお世話になるとは、そのときは予想だにできなかった。

●相変わらずのドジ

サングラスを落としたり、ストックを忘れて（しかも忘れたことにも気付かないというアルツ状態）、テント場で突然の雨が降り出したのに洗濯物を取り込むのを忘れ、ガイドがわざわざ届けてくれたり（しかも2回も！——よく私のシャツだとわかったなど感心）と、いくつかのドジは相変わらずだったが、まあ落伍することなくトラブルメーカーにならなかったのはせめてもの救いかな。

●感激のひとつ

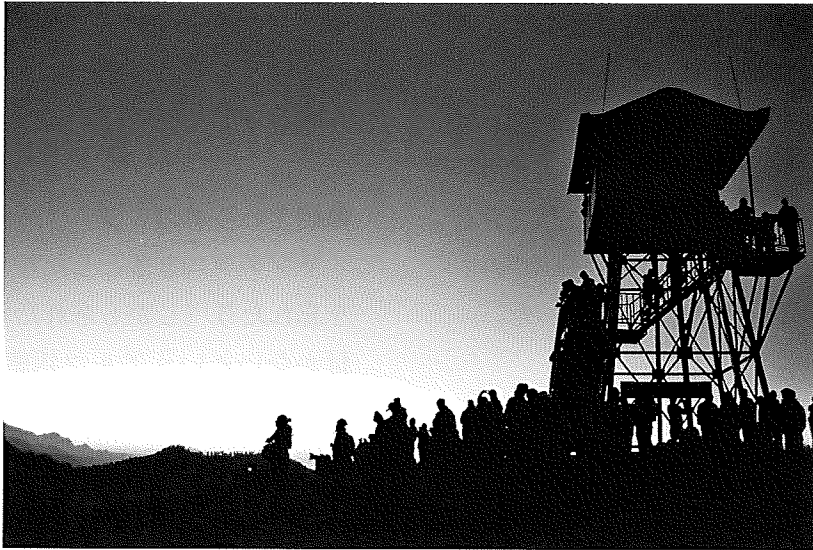
ツアーの最終日、カトマンズでチベット鍋の夕食をとった。ツアーの無事を喜びビールで乾杯したが、その際、同席した小原さんが「俺達、戦友

なもの」とおっしゃってくれたのは、大感激！ トレッキング中のことがいろいろ思い出され、仲間として認めてもらえたのかと、最長老の小原さんの言葉だけに涙がでるほど嬉しかった。

今回の信州大学学士山岳会60周年の記念すべき事業に参加できたのは、松尾隊長との出会いがあったればこ

そ。深く感謝申し上げます。また、信州大学とは何の縁もゆかりもなく、どこの馬の骨ともわからぬ私のような輩を、嫌な顔もせずに行きさせてくださった皆様方、本当に有難うございました。貴重な体験をさせていただきました。このトレッキングが有意義なものに、そして楽しい思い出となりますように！

待つ——期待を胸に



10月11日 6:00頃 プーンヒル (3198m) にて

早朝4時、ゴラパニのテントを出発。昨日は夕方から雨だったので今日の天気が危ぶまれたが、待望の晴天！ 真っ暗な中、天空の星々に向かって歩いているようだ。急な登りを詰めて、プーンヒルに辿り着く。みんなカメラを構え、ご来光を待つ。ただひたすらに。じっとしていると寒くなってくる。太陽はなかなか顔を見せず、指もかじかんでくる。しだいに空が白み始め、うっすらと東の空が紅をさしたように染まってくる。やがて「オーッ」という歓声の渦！

アンナプルナ山群を「旅」して

大安 徹雄

凄い「旅」だった。

平均年齢65歳のおっさん、おばさん19人が、20日間、標高1,000~5,400m、200kmを歩いたのだから。よく食べ、よく飲み、よく喋り本当に愉快的な旅だった。

平成21年1月17日に新幹線「軽井沢」駅に第1回事前訓練の中山道トレッキングのために集合したのが、スタートだった。

名前と顔が一致しないOBのおっさん連中と顔を合わせ、自分も60歳になっていたが、最年少だと分かった。昔よく言われた「山岳部は部歴だ。」という言葉の思い出した。体力には自信があったが、それ以上に皆さん、凄かった。先頭をきって、どんどん歩く人、写真を取り捲る人、花鳥木の解説をする人等々、そして、夜はよく飲んで、食べて、歌った。これが、この後、徳本峠合宿、富士山合宿、そしてネパールへとつながった。その間に仲間意識というもの芽生えていった。元々、同じ釜の飯を喰った面々、山や自然を愛する面々であったが、それ以上に「小川さん」というジャイアンツの影響が大きかった。

15年前にやはり小川さんが、計画した「関根さんの追悼トレッキング」

に参加したがその時は物見遊山的な雰囲気があったが、今回は本当にアカデミックであった。皆さんの博学ぶりには恐れ入りやであった。さすが、SAAC (Shinshu Academic Alpine Club) である。

3つの大きなイベントがあった。

1つは9月30日のアンナプルナII峰BCでの佐藤さん、片岡さんの慰霊祭。特に、佐藤さんは自分が山岳部に入部した時の松本の上級生であり、しごかれもしたが飲んで歌って、青春を山を語り合った思い出があった。当時のBCでアンナプルナIIの山容を仰ぎながら、行われた慰霊祭はすばらしかった。

日本人もネパールの今回のスタッフも全員が1つになっていた。

2つ目は10月4日のトロンパス。

小雪舞う中を早朝暗いうちから、歩きだし明るくなる頃、最後の5,416mを目指して、皆んなで肩を組んで登った。胸にジンと来た。最高だった。

最後は10月14日ジュゲリの「関根メモリアル」で行われた小川さんの追悼式。60余名がガンジス河につながるナラヤニ川に散骨する光景は壮大であり、厳かであった。今回の「旅」に参加できて、本当によかったと思っ

た。

すばらしい人々とすばらしい自然と
に包まれたすばらしい「旅」だった。

本当に皆さんに感謝したい。そして、
また皆さんと何処かへ「旅」したいも
のです。



昨日の豪雨がやんで、マイクロバスを待つ マルファにて

トレッキングハイライト & ネパール酔い

大沼 章子

今回でネパール訪問は、4回目になる。最初の訪問は、今回同様小川勝氏の手引きによる関根メモリアルパーク設立式に合わせたランタン谷トレッキングで、総勢50人以上のテントキャラバン隊であった。2度目は4人でジョムソン～ムクチナート往復、3度目は5人でゴウキョピークへ、バツティ泊まりで歩いた。ムクチナートへ行った時から、いつかトロンパスを越えたいという希望を持っていたので、今回のお誘いは願ってもないことであった。あらためて、信州大学学士山岳会の皆さんにお礼申し上げる。

しかし、勝さん！ 今回も一緒に歩きたかったです。勝さんの口癖、あらかた死んだようなものでも、ヒマラヤの神々しい山々に抱かれるのは悪くはないでしょう。…

9月29日、ピサンピークBCのテントが、第二隊のものであることを確認した後、池内さんと私、ガイドのスパスはBC直上の壁を急登した。しばらくすると、比較的緩やかな尾根が連続する広い斜面に出た。視線を上げると、尾根の上部でガスが降りている辺りのケルン？に数人の人影が見えた。やがて、その影がどんどん下りてくる。私たちも、人影に向かって登って

行ったが、どうやら日本人らしくない、“ネパリ”だという。“小林さんの隊か”と聞くと、屈強な高山ガイド諸氏がうなづく。“ハイ、ナマステ、Congratulation！”と握手をして分かれる。その後、さらに目を凝らすと、同じケルンの所に人影が見える。池内さんと一緒に、感激のあまり、“小林、佐藤、駒井、神野、山内”と呼ぶ。聞こえたのか、聞こえないのか定かではないが、その中の一人が手を振って応えているように見えた。池内さんは、感激のあまり、リュックを置いて駆け登って行った。残された二人も、弁当を持ってきてくれたラクシャンと共に、そのリュックを持って、追いかけた。そして、ついに、ピサンピーク登頂第二隊と合流した。第二隊の面々は疲れ切って、昨夜から飲み物以外何も食べていないとのこと。ならば、我らのガイドに荷物を持ってもらったらと提案する。駒井さんが、“僕だけ、5,800mで引き返した。次のチュルーは登りたいから、大事をとりたい”と素直に荷物を差し出された。しばらく、道なき斜面を下ると、前方の見晴らしの良い尾根の末端にケルンが見えて来た。皆、引き寄せられるように、そのケルンを目指した。そう、そのケルン

こそが、勝さんの遺骨を埋め込んだ(散骨)場所だったのだ。皆で、揃って合掌した。何とすばらしい場所が選ばれたのであろう。眼前にはアンナプルナⅡ峰が迫っている。その右上方にはほんの少しではあるが、アンナプルナⅣ峰も望まれる。そして、散骨場所は、ピサンピークの上部山麓、はるか下方にマルシャンディ川を望み、右にティリチョやチュルーが、左にはP29やマナスルも構えている。勝さんは、ヒマラヤの山々の大展望をいつも楽しめるのですよ。ちょっと寂しいのは我慢してくださいね。

さて、私にとって、13年ぶりのネパールは、とにかくバイクが増えていた。バイクはどんな人ごみにも入っていく。よく事故が起こらないなと感心もしたのだが、きっと、旅人が気づかないだけで、頻発しているのだろう。その証拠?に、カトマンズでは救急車の音がよく聞こえていたから、…。後半のジョムソン街道でも、13年前には見る事のなかったバイクと四輪駆

動車が砂塵とともにディーゼルの排気ガスを撒き散らし、マスクなしには歩けない街道になっていた。山を眺めながら歩くことを目的とした我らトレkkerには、車の導入をよいとも悪いとも言えず、ネパールの観光資源であるトレッキング環境やネパールの人々の暮らしの在り方を考えるなど、複雑な思いを抱いて帰国した。

ネパールでは、2週間ほど、朝5時起床、6時食事、7時出発の生活をしたので、そのバイオリズムから抜け出すのに時間がかかった。3か月以上たった今でも、夜更かしをした朝は、8時15分を過ぎないと起きられないことがしばしばある。3時間15分の時差から、まだ完全には抜け切れていないのだ。これも老化か、いやいや、アンナプルナ山群をしっかりと歩いてきたその余韻を楽しみなさいということだと思っている。私事ながら、4月まではタイムレコーダーの必要のない生活なので、もうしばらく、ネパール酔いを楽しむことにする！



アンナプルナサーキットを完結して

大沼 淳一

高いところはめっぽう苦手である。初めて穂高に登った時は穂高山荘で頭痛に苦しみ、下山しても1カ月ほどは頭痛がとれなかった。大学院入試の帰りに夜行列車で松本に入り、そのまま穂高山荘に登って、さらに北穂高を往復するという欲張りがたたったのかもしれない。富士山を夜行日帰りで登って山頂からの滑降に成功した時も、ターンするたびにギリギリとくる頭痛に耐えながら滑った。

初めてヒマラヤに足を踏み入れたのが、故小川勝さんに誘われた信州大学ランタン谷トレッキング（1994年）だった。キャンジンゴンバ（たしか3,800m）の二日間は嘔吐と悪寒に苦しみ、ランシサカルカ（4,300m）までがやっとであった。その3年後、ゴークョピークを目指した時は4,300mのマツヘルモで頭が割れるような頭痛に2晩苦しみ、4,800mで敗退した。ランタン谷遠征の翌年、ジヨムソンからムクチナートを往復した後ゴラバニ峠を越えてポカラまで歩いた。この時は高度が低かった（最高所がムクチナート）ので快適な旅ができた。この時から、ムクチナートの先にあるトロンパス（5,416m）越えが課題になった。しかし「俺には高すぎる…」。カグベ

ニのバツティーの夜、トロンフェディから一気に峠を越えてきたというイギリス青年と会った。そのやつれ方が尋常ではなく、いつまでも脳裏に残った。

その後、北アフリカのツブカル山（4,167m）、ボルネオのキナバル山、コロンビアのネバドデルルイス山などの4,000m峰を経験し、2003年にはキリマンジャロ登頂（5,895m）に成功した。キリマンジャロの前にメルー山（4,566m）登頂を組み込んで順化に成功したからだが、最高峰ウフルピークまでは本当にヘロヘロ状態だった。

今回アンナプルナサーキット遠征のお誘いを受けた時は、やっと宿題だった峠越えが出来るという嬉しさ半分、ぞっとする高所の苦しみへのたじろぎ半分であった。遠征隊としての順化訓練であった富士登山は行けなかったが、8月は島々南谷から徳本峠を越えて焼岳登頂、涸沢から奥穂高・前穂高を経て岳沢、蓼科山、早月尾根から剣岳、と4週連続のトレーニング登山を行って遠征に備えた。

さて本番、信州大学のみなさんの周到な遠征計画のおかげで高所順化も問題なく、ほとんど頭痛さえ出ない（わずかにムクチナートへの下山時に頭痛が出て風邪薬PL-1を1回服用）、快食

快眠快便のトレッキングとなった。小雪の中で登りつめたトロンパスでは青空が姿を見せ、優雅なトロンピークが手招きしているようであった。翌日から悪化した天候のためトロンパスは1mの積雪で閉鎖になったとか。本当に幸運に恵まれ、素晴らしいお仲間にも恵まれた楽しい山旅のなかで私のアン

ナプルナサーキットは完結した。信州大学の皆さん、本当にありがとうございました。

末筆になりますが、楽しく一緒に歩かせていただいた故寺田雅治さん、ヒマラヤトレッキングの楽しさを教えてくれた故小川勝さんのご冥福をお祈りするとともに、感謝します。



トロンパスハイキャンプへの登りを前に一息入れる

雑感

奥嶋 啓志

9月27日チャーメでの温泉入浴後翌日から胃腸を壊し、更にピサンで風邪を引き、この風邪は10月8日タトパニまで引き継ぐ、この地で夕食のカレーを久しぶりに完食、なんとこんな美味しいカレーは始めて食べたような気分、温泉に楽しく浸かることが出来た。温泉から始まり温泉で終了した我が体調不良の期間でした。我が手帳に

夕食完食時に万歳の記録があった。

胃腸は万病の元、食事が楽しく出来ること。最大の健康法であることを肝に実感できたトレッキングでした。その後は楽しくトレッキング出来ました。皆様にご迷惑をおかけいたしました。楽しく過ごさせて頂き有難うございました。

アンナプルナトレッキング雑感

川崎 誠

私のネパール行きは今回が初めてで何故もっと早く来て見なかったのかと悔やまれる。

ヒマラヤの素晴らしさや大きさなどは今更言うまでもあるまい。

心配していた高度障害は幸い軽く済んだが日常のトレーニングや節制の大切さを痛感した。物価水準の違いや貧富の差の大きいことは予想以上で日本

の見せかけの豊かさや贅沢さに危惧を感じた。

トレッキング中の昼飯はロバから荷物をおろして調理していたが、パンや握り飯などで簡単に済ませても良かったのではないと思う。何回かのホテル泊まりも良い体験だった。ネパール語や登山史など事前学習をもっとしておけば得るものが多かったらう。

アンナプルナ・サーキット・トレッキングを振り返って

坂本 貴男

(1) はじめに

先ずはじめに、信州大学の部外者である私を、信州大学の皆さんの輪の中に入れていただきまして、思い出深い大変楽しいトレッキングができましたこと、皆さんに深く感謝申し上げます。

私が今回のトレッキングに参加できるようになったのは山哲会のおかげです。私は1992年の飛行機事故でカトマンズ上空で亡くなった関根君と高校の同級生で、彼が亡くなってからも、山哲会の集まりに何度か参加させていただいておりました。ヒマラヤは高校時代に山に行き始めてからいつかは行ってみたいと思っておりましたが、今回ようやく夢を叶えることができました。

(2) トレッキング雑感

今回のアンナプルナ山群を一周するコースは、歩きごたえがあつてヒマラヤの山々を十分に満喫させてもらうことができました。東側ではマルシャンディ川沿いに歩いてマナスル山群を、西側ではカリガンダキ川沿いに歩いてダウラギリ山群の白い峰々を眼前に見ることができ、ヒマラヤの雄姿に圧倒されました。また、松尾さんをはじ

め博識である皆さんから、アンナプルナ山群・ピサンピーク・チュルー山群等のヒマラヤの山並みや花・植物・生き物等について細かく解説してもらうことができました大変勉強になりました。なによりも、博学多才な皆さんと知り合いになれたことが、私にとっては今回一番の収穫でありました。そして、サーダーをはじめガイド・クッキングスタッフ達の現地スタッフがみな人の良い礼儀正しい人達であったおかげで、毎日が楽しく、気持ちの良いトレッキングができたことは幸運でした。

今回のトレッキングでは印象深いシーンがいろいろとありましたが、なかでもピサンBCで、ピサンピークの登頂を終えて戻ってきた第2チームの人達を迎えた時は、部外者の私にとっても感動的でした。また、ピサンBCから見たアンナプルナⅡ峰も素晴しかったのですが、翌日に追悼式が催されたアンナプルナBCから見たアンナプルナⅡ峰には圧倒されました。

トロンパスを超えた翌日のムクチナートからジョムソンに行く途中のカグベニの手前で丘の中腹から見たカリガンダキ川の合流地点の景色も印象深いものでした。カリガンダキ川の右岸



に聳える大褶曲は、大陸衝突やヒマラヤ隆起のダイナミックを感じさせるもので大変興味深いものがありました。また、丘の上から見たカグベニの村は土漠の中のオアシスにあって、カリガンダキ川の河原までのソバ畑、りんご園のピンク色、緑色のモザイク模様がとても美しく見えました。

トレッキングしていて眺めた白く輝くヒマラヤの峰々は、思っていた以上に素晴らしいものでした。特に、ブーンヒルの丘とチトレのテントサイトで早朝から仰ぎ見た朝焼けに染まるダウラギリ・ツクチェピーク・アンナプルナサウスの雪峰の美しさに感動しました。また、牧歌的な村々を歩いていた道すがらに出会ったネパール人は、みな素朴であたたかい笑顔で迎えてくれました。こちらからナマステと声をかけると丁寧にナマステと返事を返してくれました。段々畑が続く山岳地帯での昔ながらの農作業風景を見て、厳しい自然環境と戦いながら生活する人々の姿に感動を覚えました。トレッキングのどの場面もが思い出深いものとなりました。

(3) 結び

今回のトレッキングを経験できたことで、これからもヒマラヤを訪ねていきたいと思っています。そして、今回のトレッキングで出会った純朴な人々の笑顔や雄大な自然がいつまでもそのままに残っていて欲しいと思います。しかし、これからはこのヒマラヤの地にあっても開発の波が押し寄せてくることによって、自然・社会状況がいろいろと変わってくるだろうと思われまます。現に、今回のトレッキングコースでも車輛が通行可能な道路が作られている箇所を何ヶ所か通って見てきました。中国からの援助でチベットからの道路建設が始められているそうです。近い将来に自動車道路が完成すればアンナプルナ・サーキットのトレッキングコースも様変わりするようになるかもしれません。一方で、ネパール政府は2011年をネパール観光年として世界中から観光客を誘致する計画をしています。これからも開発と保全の調和が図られることによって、美しいヒマラヤの自然がいつまでも残されていくように祈ります。

天国への道

柴田 武明

世界の屋根、秘境の地を歩いて体験できた意義は大きい。

天と地の狭間に生きる人々は、純粹な人々となり、けっして貧しくもない、たくましい健康体の人々。生・老・病・死に悩みはあるだろうが、やはりブツダの誕生した地である。

深いマルシャンディ川の棚田の中を這うように行くと、タールの上高地が表われ。さらに進むこと数日、氷河に削られた巨大な屏風の様な岩峰テラスが現れ、我々を圧倒する。その岩壁に付けられた跡を行けば、天国へ行くことができるそう。樹木が一本もなく一枚岩になっているそのテラスは、何本もの道跡のような筋を刻み、上へ上へと延び、峰を超え雲の中に消えてゆく、その道を行けば天国へと行けると云う。それは正に天国への道であり、

その通りに見える。はるか遠くから垣間見る毎に、無の境地になり、やがて彼岸の地へと歩いて行きたくなる道になってくる。

天国への道はここだけではなかった、さらに進むこと数日、幽谷の中を行く。レダールへの道は高い白き山々に囲まれた中を、マルシャンディ川の深い谷に沿って道は続いて行く。荒涼とした山の斜面に付けられ道は延々と続き、雲に覆われた峰へと消えて行く、その先は天国へ通じているかのよう感じられる。正に来世への道かと疑うばかりである。我々は天国への道でなく、峠を越えて、海を越えて日本の地に行くことだ。

峠を越えると、聖地のムクチナートだ。善男善女、老いも若きも、富める者も貧しき者も、聖地を目指して洗礼





を受けに・礼拝にとやって来る。インドはヒンズー教の国である、そこからはるばるやって来る者は、ある者は飛行機で、ある者は歩いてやって来る。特に歩いてやって来る人には感心する、その強い精神力は何処から来るのだろうか、わずかばかりの身の回りの物や食料を頭の上に乗せ、粗末な衣服を身にまとい、サンダル履の姿で、痩せ細った足だけで一ヶ月も掛けてやって来る。彼らは何を求めて来るのだろ

うか。それは天国への道を求めて来るのかもしれない。

幾く千年万年と続く流れの中で時は過ぎて行く。我ら同胞も過ぎ去りし人あり、これを無常と言うのだろうか。険しき峰々からの流れも緩やかに流れ、この地に思いを馳せた人、尽くした人、亡くなった人を悼みここに祈る。彼らは天国への道は見つけられたのだろうか。流れは悠久にして止まる事もなく今も続いている。



Respect

D. B. RAI (sirder)

To all of my Guests who are group of Shinshu University.

I am not fluent in English and Japanese language. But I am going to try to explain about the Shinshu University guests who were 19 persons go to 20 days Trekking round Annapurna.

First of all, I went to pick up to guests at International Terminal in Kathmandu. When they checked out from gate, all most guests were round 60~70 years old. I thought 5~6 members can not cross “Thorong La”, perhaps they can not go up from “Yak Kharka” or “Phedi”. In my 18 years experience, 7~8 members of 10 members party only go up and cross the high pass like “Thorong La”. Other 2~3members could not cross due to cause of their health condition like high altitude sickness.

I was confident of my duty how to manage to all members and staffs in trekking duration. So I briefed before starting of this trekking to all members how to walk in Himalaya, about food and warm clothes.

Moreover I taught to staffs how to care or watch to members health condition. So my staffs and I were constantly watching to our members.

Were they eating food or not?

Were they wearing warm clothes or not?

Were they walking their on style or not?

We were watching to their face at dinner time. Also we were checking to them from outside of their tent at night. After we looked at their face carefully, we understood to be able to go up or not.

I found and met with an importance point which I did not experience in 18 years job duration. That is 100% members crossed the pass 5000m above. All members exerted themselves to succeed this Trekking round Annapurna.

Our staffs and I were surprised that 19 Japanese members, over around 60~

70years old, safely crossed “Thorong la” without incident. This is the first time of my trekking duration.

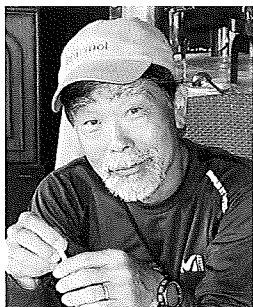
I think it is the ability of leader Takehisa Matsuo. I want to thank for all my guests from my heart and for staffs too. So I am waiting for next chance like this.

Yours` sincerely



ガンガブルナ (7,454m グンサンへの途上)

隊員紹介



松尾 武久

隊長・会計 信大学士山岳会 67歳

猛者連をまとめあげた名博労。1971年のアンナIIの遠征隊員であり、アンナプルナへの憧憬は人一倍。39年ぶりのマルシャンディ溪谷を楽しんでいた。



寺田 雅治

副隊長・医療担当 信大学士山岳会 69歳

「パルスオキシメーター」「熟大メト」のセット等、メンバーの健康管理に尽力。トロンパスまでは体調今一、越えてからは本来のスピード歩行と酒量が戻りシェルバ達もビックリ。ガーサからタトパニまでの歩きは凄かった。帰国直後の列車内で逝去された。合掌



宇都宮 昭義

副隊長・通信情報担当 信大学士山岳会 64歳

「なますておじさん」で有名。各地での慰霊祭には僧侶として大活躍。今や、粋を極めた感あり。ネパール人も眼をパチクリの尺八の名手。いつも小銭を持って喜捨に勤めた。号を観龍と称す。



小原 武

信大学士山岳会 71歳

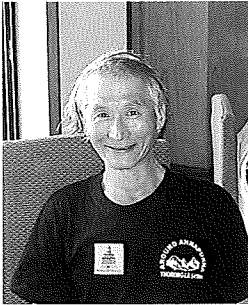
第三チームの最長老。自分の荷物は自分でと黙々と歩く姿に信大山岳部の伝統を漂わせる。緊急へりを呼ぶお金を懐に準備していた慎重さも信大流か？多治見のハーモニカ楽団の団長。



葛西 正美

水質調査担当 信大学士山岳会 71歳

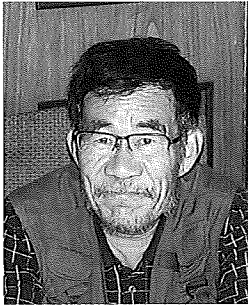
食通人で愛飲家。マルファの元女郎屋で煙草を煙らし、ロキシーを飲む姿は最高。ヒマラヤの風を心底楽しむ大人の感あり。ラスン（ニンニク）をこよなく愛する山岳会きっての韓国通。



川崎 誠

信大学士山岳会 68歳

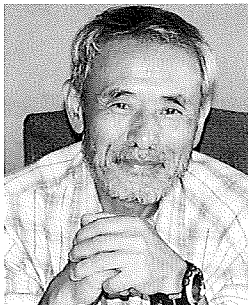
本人日く「東京渋谷の住人らしいスマートなシチーボーイ」他人日く「???シエルパの方がござっぱりしているのでは…」。ブラジルに移住していたほどの海外通。ヒマラヤは初登場。見るもの総てに感銘、感激。食欲旺盛でキャベジン錠とは無縁だった。



奥嶋 啓志

信大学士山岳会 68歳

胃痛や風邪で体調悪く苦勞の連続、でも酒は離さず。根性とねばりで最後まで歩き通す。そこに介護施設の経営者魂を見た。持っていったビデオには、トロンパス以後の映像が圧倒的に多かったのも止むを得ず。

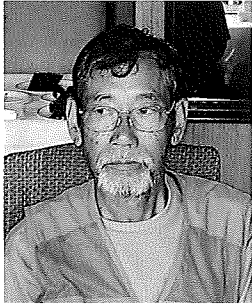


柴田 武明

食糧担当 信大学士山岳会 68歳

食料係として孤軍奮闘。信州ハムの「マイスター」、同社の製品がトレッキング完踏に功績大。毎日の食事を写真記録。フルマラソンで鍛えた力は本物。酒盛りには皆勤出席がモットー。

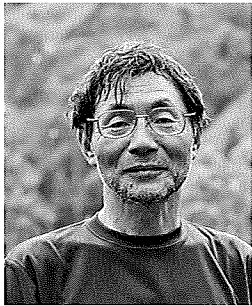
キノコと山菜では右に出る者なし。次のフィールドはネパールか？



板谷 真人

気象担当 信大学士山岳会 67歳

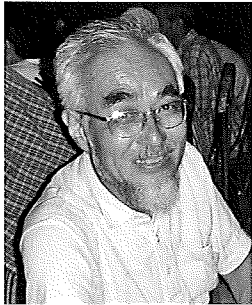
愛用の靴が行方不明。現地調達で最後まで歩き通す。物静かだが、不思議と存在感のある男。長いアフリカ生活がそうさせたか。ネパールの野菜に興味あり。マルファの林檎酒に感涙。



河原 洋

文化担当 信大学士山岳会 65歳

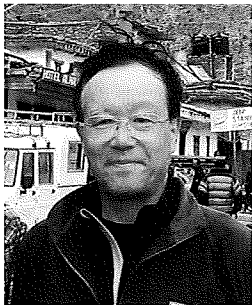
高校の先生。体重計を片手に学術調査に貢献する予定だったが……。ネパールの子供と綾取り、折り紙で友好に励む。花や蝶の撮影に疲れも見せず走り回る。自他共に認める下戸故に毎晩の酒盛りは雰囲気を楽しむ方にまわっていた。



杉本 敏宏

信大学士山岳会 63歳

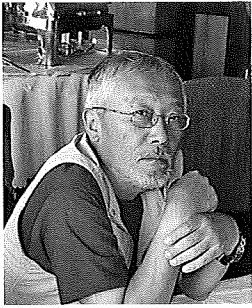
元上越市の議員さん。花蝶木に精通し博識多芸。写真の腕もかなりのもの。隊の前に後に飛び回り撮影に精をだす。高山病なんか何処吹く風。雪国で鍛えたせいか酒の席では紅い笑顔になってからが強い。



池内 寛幸

通信情報担当 信大学士山岳会 62歳

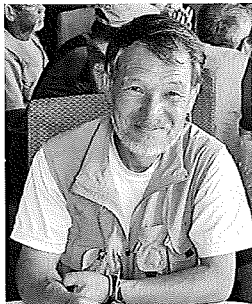
ヨーロッパアルプスでの輝かしい実績を踏まえて、ヒマラヤに初登場。3時間で走るマラソンで鍛えた健脚ぶりは他を圧倒。高山病知らずの男。日本との通信に活躍。雨のカリガンダキ脱出では苦労した。



大安 徹雄

記録担当 信大学士山岳会 60歳

信大のメンバー中で最年少（60歳で）。第三チームのガンチャ。「山岳部は部歴だ！」から未だ開放されず？並み居る先輩に気を使ってくれた。シェルパも驚く明るい酒豪。彼のピッケルは今も故佐藤正敏の腕の中にある。



坂本 貴男

故関根倫雄友人 64歳

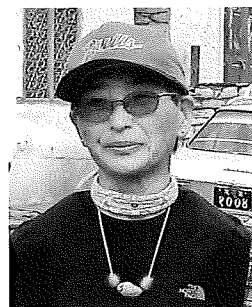
海外青年協力隊、JICAで海外勤務豊富。現地の人々との交流はお手の物。誰ともすぐ友人になってしまう特技あり（若い女性は不得手）忘れ物と集合時間にギリギリに来る特技も持つ。



大沼 淳一

故小川勝友人 64歳

高校、大学と東北の山を歩いてきた。現在ブナの木山スキークラブの会長。環境問題に取り組んでいる博識家。高山でも唄いながら歩くという特技の持ち主。奥さんとの合唱に仲の良さが現れていた。



大沼 章子

故小川勝友人 61歳

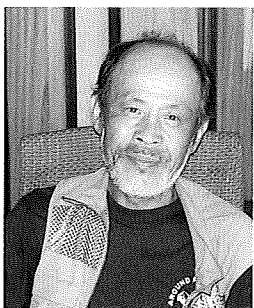
今回全行程をスカートで走破。夢はエベレストにスカートで登ること。高山病も逃げていくその健脚は和製シェルパニカ？ネパールの水道の水質検査とビデオ撮影にも頑張った。



滝川 正子

故小川勝友人 64歳

元高校の先生。花蝶木に精通。小柄ながら、パワーは抜群。膝の古傷を労わりながらのトレッキング。雑い信大ペースに戸惑いながらも最後まで完踏。酒席では生徒を見守る如くの風情あり。



石山 駿

松尾武久友人 67歳

瀬戸の陶芸家。元高校の先生。その芸術的センスはさすがで、アンナⅡ BC慰霊祭のケルンは彼の指導で完成。道すがらのスケッチ、休憩時のハーモニカと多芸。次はカラコルム・バルトロ氷河をひそかに狙っているらしい。



大島 いよ子

会計補助 松尾武久友人 58歳

第三チームの最年少。ヒマラヤトレッキングは4回目という親ネパール派。山に居ることが大好きで酒席もちろん厭わない。重い銀板カメラを携えて迫力満点の写真を撮影する趣味を持つ。



ディビイ・ライ

サーダー 48歳

日本人19名、配下のガイド7名、キッチンボーイ他19名を取り纏めたマネージメント力を評価したい。元先生らしい温厚さと義理人情に厚い。「こんなによく酒を飲む隊は見たこと無い！」と呆れ驚いていた。

アンナプルナⅡ峰ベースキャンプの今昔

コラム①

1971年5月、氷河は奥の滝の上部までである。こんなBCだった。



2009年10月、氷河は後退して滝の上のスラブのさらに上になっている。



ミネラルウォーターの料金と標高の関係

コラム③

【参考】 ミネラルウォーター（1ℓのペットボトル）の料金と標高の関係

大島いよ子

| 日付 | 地名：標高 (m) | 料金 (ルピー Rs) |
|--------|-------------------|-------------|
| 9 / 24 | ガティ：930 | 50 |
| 25 | ジャガット：1,300 | 70 |
| 26 | タール：1,700 | 110 |
| 28 | ドゥクレボカリ：3,060 | 160 |
| 29 | ピサン下村：3,300 | 160 |
| 10 / 6 | ジョムソン：2,710 | 70 |
| 7 | マルファ：2,670 | 70 |
| 8 | タトパニ：1,190 | 60、80 |
| 12 | ボカラ：900 | 20 |
| 13 | ボカラ（ネパールダンスレストラン） | 50 |
| 14 | ジュゲディ | 20 |
| 15 | バラトブル | 30 |
| | ゴダワリリゾートホテル：1,500 | 50 |
| 16 | カトマンズ：1,400 | 20 |

以上

*料金は、標高が高くなると高く、低いと安くなっているのがわかる。

*最安値はボカラ・ジュゲリ・カトマンズの20Rs

*最高値はデュクレボカリ・ピサン下村の160Rs

*ボカラのように、同じ場所でもレストランは高い。



